

現代の日展作家たち
— 日本的美

2020

NITTEN Artists Today: The Beauty of Japan



中山忠彦「繡衣立像」2018年

はじめに

命を守る 美を届ける

日展は、明治四十年の文部省美術展覧会（文展）から数えて今年一一三年を迎えます。そうしたなか、予測のできない新型コロナウイルスの蔓延により、四月以降に予定されていた巡回展を中止せざるを得ませんでした。秋の日展は、みなで力を合わせ開催させていただく運びとなりました。

公益社団法人日展は、日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の五部門からなる作家の団体です。毎年、全国から一万点を越すご応募をいただき、入選者と会員などを合わせて約三千点の新作を国立新美術館の会場に展示いたしております。

今年は密になることを避け、開会式、オープニングパーティ、各科懇親会や講演会、一部のイベントを中止にし、柱となる五科による美術展の開催に注力してまいります。長い自粛の時期がありました。作家は、年に一度の日展という発

表の場をめざし、日々、真摯に制作を進めております。作品の審査にあたりましても、万全の注意を払い、作家の純粹な想いを込めた日展を開催いたします。

今年の出品作として私は「命を守る」という作品を制作しております。子を抱く母親の後ろには、大きく包み込んで守ってくれる存在がいます。現在の状況や日展の今後を考え、大事なものを守りたい、また何か大きな力に守られたいという気持ちを表現したいと考えました。

かつてはベストやスペイン風邪の蔓延などがありました。その都度人類は乗り越えてきました。また、私たちが子どもの頃に体験しました逃げ場のない悲惨な戦争と比べますと、今、私達は、献身的に命を守る仕事をされている医療関係者の方々、その他、多くのコロナ終息の為に尽くされている方々に、心からの感謝と敬意を払い、その上で皆が身を守り、油断しないで最大の注意と努力をすることで、必ず明るい時が来ると信じております。

今こそ、日展作家として社会に「美」や「やすらぎ」を届けていく使命と責任を感じております。一点でも美術や

芸術の力で誰かを救えるようなものができますよう、皆様の心に寄り添えるような作品を発表し、ご高覧いただけましたらと願っております。今後も皆様のご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

公益社団法人日展 理事長

奥田小由女



日展の顧問・理事・監事紹介

インタビュー

見の眼弱く、観の眼強く

日本画

土屋 禮一

大自然のもとで、現場主義を貫く

洋画

佐藤 哲

目に見えないものを形にする

彫刻

山本 眞輔

装飾とフォルム、そして色彩、模様、素材が響きあう

工芸美術

森野 泰明

随処に主となれば、立処みな真なり

書

星 弘道

自分のスタイルと伝わることの責任を感じて

日本画

大西 健太

好きなことをベースに、いい作家をめざす

洋画

松本 貴子

時代をとらえ、粘土に託す

彫刻

安田 陽子

自然の循環を漆工芸で表現

工芸美術

武田 司

篆刻の字法、章法、刀法。古典に学ぶ

書

河西 樸堂

日展開催概要と会期中のイベント





日本画

理事

やまざき たか お
山崎 隆夫

1940年、新潟県生まれ。下保昭に師事。1967年、京都教育大学特修美術日本画専攻科卒業。1965年、第8回日展初入選。1972年、第4回日展「森」により特選受賞。1973年、第5回日展「トマト」により無鑑査・特選受賞。1992年、第24回日展「海游」により日展会員賞受賞。2008年、第40回日展「沼宴」により内閣総理大臣賞受賞。2011年、第42回日展出品作「海燐」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。



「何処へ」改組新第5回日展



日本画

理事

むらい まさゆき
村居 正之

1947年、京都府生まれ。池田遙邨に師事。1968年、画塾・青塔社へ入会。1971年、第3回日展初入選。1984年、第7回日展「赤い陸橋」により特選受賞。1990年、第22回日展「サンマルタン運河」により特選受賞。2018年、改組新第5回日展「暮れゆく時」により文部科学大臣賞受賞。2020年、改組新第3回日展出品作「日照」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、大阪芸術大学教授。紺綬褒章受章。



「ミナト」改組新第6回日展



日本画

副理事長 事務局長

つち や れい いち
土屋 禮一

1946年、岐阜県生まれ。加藤東一に師事。1967年、武蔵野美術大学実技専修科日本画卒業。同年、第10回日展初入選。1969年、改組第1回日展「水たまり」により特選・白寿賞受賞。1976年、第8回日展「暮れて行く」により特選受賞。1985年、第17回日展「隠岐」により日展会員賞受賞。2005年、第37回日展「椿樹」により文部科学大臣賞受賞。2007年、第38回日展出品作「軍鶏」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長事務局長、日本芸術院会員、金沢美術工芸大学名誉教授。



「海の哲人」改組新第6回日展



洋画

顧問

てらさか ただ お
寺坂 公雄

1933年、広島県生まれ。1956年、愛媛大学教育学部美術科卒業。1954年、第10回日展初入選。1962年、第5回日展「カニのある静物」により特選受賞。1986年、第18回日展「レリーフのある棚」により日展会員賞受賞。2001年、第33回日展「デルフォイへの道」により文部科学大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作「アクロポリスへの道」により日本芸術院賞受賞。2009年、日展事務局長。2013年、日展理事長。2020年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、光風会理事長、山梨大学名誉教授。



「山峡の彩り」改組新第6回日展



日本画

理事

わたなべ のぶよし
渡辺 信喜

1941年、京都府生まれ。山口華楊に師事。1964年、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）日本画科卒業。同年、第7回日展初入選。1971年、第3回日展「林檎」により特選受賞。1984年、第16回日展「林檎」により特選受賞。2015年、改組新第2回日展「夏草」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事、京都精華大学名誉教授。



「青い沼」改組新第6回日展



日本画

理事

ふく だ せんけい
福田 千恵

1946年、東京都生まれ。佐藤太清に師事。1969年、武蔵野美術大学造形学部日本画科卒業。同年、改組第1回日展初入選。1981年、第13回日展「紫陽花とテレサ」により特選受賞。1984年、第16回日展「単衣の女」により特選受賞。1996年、第28回日展「刀匠」により日展会員賞受賞。1999年、第31回日展「ながい夜」により文部大臣賞受賞。2006年、第37回日展出品作「ピアニスト」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



「古道成寺」改組新第6回日展

日展の顧問・理事・監事紹介

2020年8月20日現在



洋画

副理事長

ね ぎ し ゆ う じ

根岸 右司

1938年、埼玉県生まれ。渡邊武夫に師事。1961年、埼玉大学教育学部美術科卒業。同年、第4回日展初入選。1987年、第19回日展「鉱山寥乎」により特選受賞。1992年、第24回日展「雪の選炭工場」により特選受賞。2015年、改組新第2回日展「北海の岬」により内閣総理大臣賞受賞。2017年、改組新第3回日展出品作「古潭風声」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員。



「東茶人の浜」改組新第6回日展



洋画

理事

さい とう ひ で お

斎藤 秀夫

1943年、福島県生まれ。伊藤清永に師事。1966年、中央大学卒業。1978年、第10回日展初入選。1991年、第23回日展「午後のひととき」により特選受賞。1993年、第25回日展「ショールの婦人」により特選受賞。2019年、改組新第6回日展「清新」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事。



「清新」改組新第6回日展



洋画

顧問

ふ じ も り か ね あ き

藤森 兼明

1935年、富山県生まれ。高光一也に師事。1958年、金沢美術工芸大学油絵科卒業。1956年、第12回日展初入選。1980年、第12回日展「画室にて」により特選受賞。1984年、第16回日展「僧院の午後」により特選受賞。2001年、第33回日展「アドレクションパンタナサ」により日展会員賞受賞。2004年、第36回日展「アドレクション・デミトリオス」により内閣総理大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作「アドレクションサンビターレ」により日本芸術院賞受賞。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「アドレクションアナウンセーション」改組新第6回日展



洋画

顧問

な か や ま た だ ひ こ

中山 忠彦

1935年、福岡県生まれ。伊藤清永に師事。1954年、第10回日展初入選。1969年、改組第1回日展「椅子に倚る」により特選受賞。1981年、第13回日展「縞衣」により特選受賞。1990年、第22回日展「青衣」により日展会員賞受賞。1996年、第28回日展「華粧」により内閣総理大臣賞受賞。1998年、第29回日展出品作「黒扇」により日本芸術院賞受賞。2001年、日展事務局長。2009年、日展理事長。2019年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、白日会会長。



「ギリシャ幻想」改組新第6回日展



洋画

監事

ま ち だ ひ ろ ぶ み

町田 博文

1953年、茨城県生まれ。寺島龍一に師事。1976年、茨城大学卒業。1982年、第14回日展初入選。2000年、第32回日展「雪の朝」により特選受賞。2003年、第35回日展「新雪の麓」により特選受賞。2018年、改組新第5回日展「新雪の河畔」により文部科学大臣賞受賞。現在、日展監事。



「冬色の湖水」改組新第6回日展



洋画

理事

ゆ や ま と し ひ き

湯山 俊久

1955年、静岡県生まれ。坪内正、伊藤清永、中山忠彦に師事。1979年、多摩美術大学油画科卒業。1983年、第15回日展初入選。1990年、第22回日展「悠想」により特選受賞。1998年、第30回日展「想春」により特選受賞。2004年、第36回日展「爽秋」により日展会員賞受賞。2010年、第42回日展「L'allure（ラリュール）」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組新第3回日展出品作「l'Aube（夜明け）」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。



「秋陽」改組新第6回日展



洋画

理事

さ とう て つ

佐藤 哲

1944年、大分県生まれ。江藤哲に師事。1966年、大分大学学芸学部美術科卒業。1975年、第7回日展初入選。1982年、第14回日展「紫陽花の頃」により特選受賞。1993年、第25回日展「黒衣」により特選受賞。2009年、第41回日展「ひととき」により文部科学大臣賞受賞。2013年、第44回日展出品作「夏の終りに」により日本芸院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、東光会理事長。



「刻と光」改組新第6回日展



洋画

理事

こ な だ い っ き

小灘 一紀

1944年、鳥取県生まれ。芝田米三、大島士一に師事。1967年、金沢美術工芸大学卒業。1973年、第5回日展初入選。1992年、第24回日展「窓辺」により特選受賞。1995年、第27回日展「横たわる」により特選受賞。2002年、第34回日展「めざめ」により日展会員賞受賞。2017年、改組新第4回日展「伊須気余理比売」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事、日洋会理事長。



「石之日売命（仁徳天皇の大戸）」改組新第6回日展



彫刻 理事
のうじま せいじ
能島 征二

1941年、東京都生まれ。小森邦夫に師事。1964年、茨城大学教育学部美術科卒業。1962年、第5回日展初入選。1969年、改組第1回日展「窮」により特選受賞。1971年、第3回日展「省」により特選受賞。1990年、第22回日展「五月の女」により日展会員賞受賞。2000年、第32回日展「悠久の時」により文部大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作「慈愛ーこもれび」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



「和」改組新第6回日展



彫刻 副理事長
かんべ みねお
神戸 峰男

1944年、岐阜県生まれ。清水多嘉示、木下繁に師事。1967年、武蔵野美術大学造形学部卒業。1968年、第11回日展初入選。1976年、第8回日展「裸婦」により特選受賞。1978年、第10回日展「裸婦」により特選受賞。2006年、第38回日展「長風」により文部科学大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作「朝」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、日本彫刻会理事長、名古屋芸術大学名誉教授。



「麒麟児」改組新第6回日展



彫刻 顧問
なかむら しんや
中村 晋也

1926年、三重県生まれ。東京高等師範学校卒業。1950年、第6回日展初入選。1967年、第10回日展「華の譜」により特選受賞。1968年、第11回日展「想華の詞」により無鑑査・特選受賞。1969年、改組第1回日展「宴の華」により菊花賞受賞。1981年、第13回日展「星のいのり」により日展会員賞受賞。1984年、第16回日展「焦躁の旅路」により文部大臣賞受賞。1988年、第19回日展出品作「朝の祈り」により日本芸術院賞受賞。1996年、中村晋也美術館を設立。1999年、勲三等旭日中綬章受章。2002年、文化功労者。2007年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、鹿児島大学名誉教授、筑波大学名誉博士。



「親子の旅立ち」改組新第6回日展



彫刻 顧問
かわさき ひろてる
川崎 普照

1931年、東京都生まれ。斎藤素庵、平野敬吉、進藤武松に師事。1961年、第4回日展初入選。1964年、第7回日展「暖流」により特選受賞。1993年、第25回日展「未来への讃歌」により内閣総理大臣賞受賞。1998年、第29回日展出品作「大地」により日本芸術院賞受賞。2007年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「清風」改組新第6回日展



彫刻 理事
やまだ ともひこ
山田 朝彦

1943年、広島県生まれ。1966年、明治大学卒業。1974年、第6回日展初入選。1987年、第19回日展「雄」により特選受賞。1990年、第22回日展「若人」により特選受賞。2012年、第44回日展「こもれび」により文部科学大臣賞受賞。2016年、改組新第2回日展出品作「朝の響き」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。



「永遠に」改組新第6回日展



彫刻 理事
みやせ とみゆき
宮瀬 富之

1941年、京都府生まれ。松田尚之に師事。1968年、金沢美術工芸大学卒業。1967年、第10回日展初入選。1973年、第5回日展「風のよそおい」により特選受賞。1974年、第6回日展「風の中を」により無鑑査・特選受賞。2005年、第37回日展「はんなりと石庭に」により内閣総理大臣賞受賞。2009年、第40回日展出品作「源氏物語絵巻に想う」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、大阪成蹊短期大学名誉教授。



「無口な男」改組新第6回日展



彫刻 顧問
ひる た じろう
蛭田 二郎

1933年、茨城県生まれ。小森邦夫に師事。1958年、茨城大学教育学部卒業。1965年、第8回日展初入選。1966年、第9回日展「ひとり」により特選受賞。1967年、第10回日展「女」により特選受賞。1968年、第11回日展「女' 68」により菊花賞受賞。1996年、第28回日展「告知」により文部大臣賞受賞。2002年、第33回日展出品作「告知ー2001ー」により日本芸術院賞受賞。2016年、北茨城市蛭田二郎彫刻ギャラリー開設。2018年旭日中綬章受章、現在、日展顧問、日本芸術院会員、岡山大学名誉教授、倉敷芸術科学大学名誉教授。



「永日抄2019」改組新第6回日展



彫刻 顧問
はしもと けんたろう
橋本 堅太郎

1930年、東京都生まれ。平櫛田中、澤田政廣、圓鍔勝三に師事。1953年、東京藝術大学彫刻科卒業。1954年、第10回日展初入選。1966年、第9回日展「弧」により特選受賞。1970年、第2回日展「薫風」により特選受賞。1992年、第24回日展「清冽」により文部大臣賞受賞。1996年、第27回日展出品作「竹園生」により日本芸術院賞受賞。1999年、日展事務局長。2000年、日展理事長。2009年、旭日中綬章受章。2011年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員、東京学芸大学名誉教授。



「いのち」改組新第6回日展



工芸美術 顧問

なか い てい じ
中井 貞次

1932年、京都府生まれ。1954年、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）工芸科卒業。1956年、同大学専攻科修了。1953年、第9回日展初入選。1969年、改組第1回日展「集積」により特選・北斗賞受賞。1977年、第9回日展「間の実在」により特選受賞。1990年、第22回日展「巨木積雪」により文部大臣賞受賞。1993年、第23回日展出品作「原生雨林」により日本芸術院賞受賞。2017年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。



「旅の時空」改組新第6回日展



工芸美術 顧問

おお ひ とし ろ う
大樋 年朗

1927年、石川県生まれ。1949年、東京美術学校（現・東京藝術大学）工芸科卒業。1950年、第6回日展初入選。1956年、第12回日展「『風寒し』青釉花器」により北斗賞受賞。1957年、第13回日展「『鶏』緑釉壺」により特選・北斗賞受賞。1961年、第4回日展「釉彩『魚紋』花器」により特選・北斗賞受賞。1982年、第14回日展「『歩いた道』花器」により文部大臣賞受賞。1985年、第16回日展出品作「『峙つ』花三島飾壺」により日本芸術院賞受賞。2004年、文化功労者。2008年、金沢学院大学副学長。2011年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「黒陶『生命の木』」改組新第6回日展



彫刻 監事

い し ぐ ろ こ う じ
石黒 光二

1952年、山形県生まれ。高橋剛に師事。1974年、多摩美術大学彫刻科卒業。1976年、第8回日展初入選。1985年、第17回日展「風の調べ」により特選受賞。1988年、第20回日展「風舞」により特選受賞。1998年、第30回日展「幻華」により日展会員賞受賞。2016年、改組新第3回日展「月光」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展監事。



「抒情詩」改組新第6回日展



彫刻 理事

や ま も と し ん ぺ い
山本 眞輔

1939年、愛知県生まれ。1963年、東京教育大学（現・筑波大学）教育学専攻科卒業。1962年、第5回日展初入選。1972年、第4回日展「生きがい」により特選受賞。1980年、第12回日展「ひたむき」により特選受賞。1992年、第24回日展「いい日」により日展会員賞受賞。1999年、第31回日展「森からの声」により内閣総理大臣賞受賞。2004年、第35回日展出品作「生生流転」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、名古屋市立大学名誉教授。



「黎明の祈り―智―」改組新第6回日展



工芸美術 理事長

おく だ き ゆ め
奥田 小由女

1936年、大阪府生まれ。1967年、第10回日展初入選。1972年、第4回日展「或るページ」により特選受賞。1974年、第6回日展「風」により特選受賞。1988年、第20回日展「海の詩」により文部大臣賞受賞。1990年、第21回日展出品作「炎心」により日本芸術院賞受賞。2006年、奥田元宋・小由女美術館開館。2008年、文化功労者。2013年、日展事務局長。2014年、日展理事長。現在、日展理事長、日本芸術院会員、現代工芸美術家協会理事長。



「令和に明けゆく」改組新第6回日展



工芸美術 顧問

も り の た い け い
森野 泰明

1934年、京都府生まれ。1958年、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）卒業。1960年、同大学専攻科修了。1957年、第13回日展初入選。1960年、第3回日展「青釉花器」により特選・北斗賞受賞。1966年、第9回日展「花器『藍』」により特選・北斗賞受賞。2007年、第38回日展出品作「扁壺『大地』」により日本芸術院賞受賞。2019年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「赫綉弧状文扁壺」改組新第6回日展



工芸美術 顧問

い ま い ま さ ゆ き
今井 政之

1930年、大阪府生まれ。楠部彌弌に師事。1957年、広島県立竹原工業学校金属工芸科卒業。1953年、第9回日展初入選。1959年、第2回日展「焼メ『盤』」により特選・北斗賞受賞。1963年、第6回日展「『泥彩』壺」により特選・北斗賞受賞。1998年、「赫窯 雙蟹」により日本芸術院賞受賞。2009年、旭日中綬章受章。2011年、文化功労者。2018年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「アカシユウ、ミールバイ大皿」改組新第6回日展



工芸美術 顧問

い と う ひ ろ し
伊藤 裕司

1930年、京都府生まれ。山崎覚太郎に師事。1953年、京都市立日吉ヶ丘高等学校美術工芸コース漆芸科卒業。同年、第9回日展初入選。1966年、第9回日展「刻象“大地”その内なるもの」により特選・北斗賞受賞。1968年、第11回日展「燦光」により特選・北斗賞受賞。1983年、第15回日展「収穫」により日展会員賞受賞。2004年、第35回日展出品作「スサノオ聚抄」により日本芸術院賞受賞。2018年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「梅開上苑」改組新第6回日展



書 顧問
ひ び の こう ほう
日比野 光鳳

1928年、京都府生まれ。父の日比野五鳳に師事。同志社大学卒業。1967年、第10回日展初入選。1975年、第7回日展「春」により特選受賞。1978年、第10回日展「春」により特選受賞。1987年、第19回日展「天の海」により日展会員賞受賞。1997年、第29回日展「三日月」により内閣総理大臣賞受賞。1999年、第30回日展出品作「花」により日本芸術院賞受賞。2011年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「ふゆ」改組新第6回日展



書 顧問
お ぞ き ゆう ほう
尾崎 邑鵬

1924年、京都府生まれ。廣津雲仙、辻本史邑に師事。1954年、第10回日展初入選。1963年、第6回日展「陸游の詩」により特選・芭竹賞受賞。1970年、第2回日展「高青邱詩 送陳少府赴嘉定」により菊花賞受賞。1981年、第13回日展「竹窓」により日展会員賞受賞。1986年、第18回日展「高青邱詩」により文部大臣賞受賞。1993年、第24回日展出品作「杜少陵詩」により日本芸術院賞受賞。2016年、文化功労者。現在、日展顧問。



「其游趣々」改組新第6回日展



工芸美術 理事
は る や ま ふ み の り
春山 文典

1945年、長野県生まれ。蓮田修吾郎に師事。1971年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。1977年、第9回日展初入選。1979年、第11回日展「四角柱イン・セクション」により特選受賞。1984年、第16回日展「無限標」により特選受賞。2000年、第32回日展「風の門」により文部大臣賞受賞。2004年、横浜美術短期大学（現・横浜美術大学）学長。2016年、改組 新 第2回日展出品作「宙の河」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、横浜美術大学名誉教授。



「天空の廻廊」改組新第6回日展



工芸美術 理事
た け ご し と し あ き
武腰 敏昭

1940年、石川県生まれ。金沢美術工芸大学卒業。1963年、第6回日展初入選。1980年、第12回日展「容」により特選受賞。1986年、第18回日展「蒼い花器」により特選受賞。2001年、第33回日展「静寂」により内閣総理大臣賞受賞。2010年、第41回日展出品作「湖畔・彩釉花器」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、金沢学院大学名誉教授。



「無鉛釉薬」甕げな記憶」改組新第6回日展



書 理事
い し げ け い どう
井茂 圭洞

1936年、兵庫県生まれ。深山龍洞に師事。1961年、京都学芸大学（現・京都教育大学）美術科書道卒業。同年、第4回日展初入選。1977年、第9回日展「梅」により特選受賞。1979年、第11回日展「富士山」により特選受賞。1993年、第25回日展「無常」により日展会員賞受賞。2001年、第33回日展出品作「清流」により内閣総理大臣賞受賞。2003年、第33回日展出品作「清流」により日本芸術院賞受賞。2018年、文化功労者。現在、日展理事、日本芸術院会員、京都教育大学名誉教授。



「御酒」改組新第6回日展



書 理事
あ ら い こう ふ う
新井 光風

1937年、東京都生まれ。西川寧に師事。1966年、第9回日展初入選。1972年、第4回日展「九穀斯豊」により特選受賞。1978年、第10回日展「熱鐵」により特選受賞。1994年、第26回日展「雲龍風虎」により日展会員賞受賞。2000年、第32回日展「盛稲梁」により文部大臣賞受賞。2004年、第35回日展出品作「明且鮮」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。2020年、旭日小綬章受章。現在、日展理事、大東文化大学名誉教授。



「羸絀」改組新第6回日展



工芸美術 理事
よ し か は た お
吉賀 将夫

1943年、山口県生まれ。1969年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。1975年、第7回日展初入選。1983年、第15回日展「夜明け」により特選受賞。1985年、第17回日展「曜」により特選受賞。1996年、第28回日展「萩釉広口陶壺『ある光景の印象』」により文部大臣賞受賞。2000年、第31回日展出品作「萩釉広口陶壺『曜'99・海』」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、山口大学名誉教授、萩陶芸美術館・吉賀大眉記念館理事長。



「萩釉陶壺」悠2019」改組新第6回日展



工芸美術 理事
み た む ら あ り す み
三田村 有純

1949年、東京都生まれ。祖父の三田村自芳、父の三田村秀芳、高橋節郎、田口善国に師事。1973年、東京学芸大学教育学部美術科（工芸専攻）卒業。同年、第5回日展初入選。1975年、東京藝術大学大学院美術研究科（漆芸専攻）修了。1985年、第17回日展「ピラミス・遙か天空に」により特選受賞。1988年、第20回日展「ピラミス・嵩峻」により特選受賞。2014年、改組 新 第1回日展「炎立つ」により日展会員賞受賞。2016年、改組 新 第3回日展「月の光 その先に」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組 新 第3回日展出品作「月の光 その先に」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、東京藝術大学名誉教授。



「天浮橋アマウキハン Heavenly floating bridge」改組新第6回日展

日展作家は語る

芸術とは何か
創作とは何か



書 理事
た か き せ い ろ
高木 聖雨

1949年、岡山県生まれ。青山杉雨、成瀬映山に師事。1973年、大東文化大学卒業。1974年、第6回日展初入選。1989年、第21回日展「天馬」により特選受賞。1993年、第25回日展「建始」により特選受賞。2006年、第38回日展「協穆」により日展会員賞受賞。2015年、改組 新 第2回日展「駿歩」により文部科学大臣賞受賞。2017年、改組 新 第3回日展出品作「協戮」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、謙慎書道会理事長、全国書美術振興会理事長、大東文化大学名誉教授。



「心知鉄石」改組 新 第6回日展



書 副理事長
く ろ だ け ん い ち
黒田 賢一

1947年、兵庫県生まれ。西谷卯木に師事。1969年、改組 第1回日展初入選。1986年、第18回日展「山里」により特選受賞。1990年、第22回日展「ふじの雪」により特選受賞。2003年、第35回日展「深雪」により日展会員賞受賞。2009年、第41回日展「静寂」により内閣総理大臣賞受賞。2011年、第42回日展出品作「小倉山」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、日本書芸院理事長。



「梅花」改組 新 第6回日展



書 監事
つ ち は し や す こ
土橋 靖子

1956年、千葉県生まれ。日比野五鳳、日比野光鳳に師事。1979年、東京学芸大学書道科卒業。1980年、東京学芸大学専攻科（書道）修了。同年、第12回日展初入選。1992年、第24回日展「雪」により特選受賞。1998年、第30回日展「夕されば」により特選受賞。2008年、第40回日展「良寛春秋」により日展会員賞受賞。2016年、改組 新 第3回日展出品作「墨染」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組 新 第4回日展出品作「かつしかの里」により日本芸術院賞受賞。現在、日展監事。



「秋の野」改組 新 第6回日展



書 理事
ほ し こう どう
星 弘道

1944年、栃木県生まれ。浅香鉄心に師事。1967年、立正大学卒業。1975年、第7回日展初入選。1990年、第22回日展「蘇東坡詩」により特選受賞。1992年、第24回日展「曾鞏詩」により特選受賞。2007年、第39回日展「李濂詩」により日展会員賞受賞。2010年、第42回日展「小学之一文」により文部科学大臣賞受賞。2012年、第43回日展出品作「李頎詩贈張旭」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。



「翽飛龍」改組 新 第6回日展

土屋禮一

日本画家
日展副理事長
事務局長

東京・多摩地区の中心にある国分寺市、玉川上水のそばの緑の小道を抜けて、静かな住宅街を行くと、奥まった一画、趣のある表札の奥に土屋さんのご自宅がある。十八歳で岐阜県大垣市から東京の武蔵野美術大学へ進まれて以来、ずっと多摩地区にお住まいで、現在の地は四十年近くになるという。書、写真、グッズ、オブジェ、思い出の品々に囲まれたアトリエで、珠玉のお話を伺った。



大嘗祭の屏風絵を描いて

近年の大きな仕事は、なんといっても昨年、大嘗祭のために六曲一双の屏風絵を宮内庁に納められたことである。大嘗祭は新天皇が即位後初めて国の安寧や五穀豊穡を祈る最も重要とされる宮中祭祀で、二〇一九年十一月十四日夕方から十五日未明にかけて「悠紀殿供饌の儀」と「主基殿供饌の儀」が行われ、そちらに作品が展示された。悠紀は現在の東日本を、主基は西日本を指している。主基地方、西日本の屏風絵を土屋禮一さんが担当された。東日本は田淵俊夫さんである。平成のときは、東山魁夷さんと高山辰雄さんが東と西を描かれた。

アトリエには、何も描かれていない二枚の金屏風が立てかけられていた。この二枚は予備で用意されていたという。まだ当時の余韻が残っていた。

制作は五月からで、京都の四季をテーマに九月いっぱいまで仕上げることとなった。最初の一月月は京都を行ったり来たりでスケッチと取材をした。右隻が春の醍醐寺の桜、夏は大文字焼き、背景には俯瞰の京都御所を、左隻には、秋の嵐山・渡月橋の紅葉、冬は天橋立の雪溪、手前に京都府の草花「嵯峨菊」を描くと決めた。

「ムサビの一年生の時、奥村土牛先生にも教わっていて、先生の醍醐寺の桜の名作を一度見てみたいと、卒業後、スケッチに行きました。寺院三宝院の庭には三本の大き

な桜があり、その中で小ぶりの比較的静かな桜が先生の桜だとわかり、僕は一番大樹の桜をスケッチしました。兄弟桜をいつか描いてみたいと思っていたからです。今回、『春はあの桜を』と直感しました。桜を大きく描き、後ろには、日本人が誇りとすべき京都御所を、その向こうには自然と大文字焼きが浮かびました」

左隻は秋、冬である。「大和絵の伝統であるすやり霞の間を京都タワーが突き抜ける構図が浮かび、下図で進めていましたが、タワーが個人の所有物とわかり、諦めました。京都には海があり、日本三景の一つである、天橋立を雪の景色として描くことにしました」。

手前に描いた嵯峨菊には土屋さんの思い



「淵」
2013年
第45回日展

入れがある。それは、俵屋宗達が、ハンセン病に倒れた書家角倉素庵の鎮魂のために「風神雷神図屏風」を描いたというエピソード。「これは絵描きにとつてたまらない話で嵯峨の素庵のお墓を訪ねたい、嵯峨を絵に描きたい、と思っていたのです」。こうした物語が根底にあり、京都府の花である嵯峨菊を添えた。いろいろ緊張の三か月間、日本画家として大変な勉強をされたという。

切です。日本画には『受援力』という言葉があります。助けられ上手ということです。金地画面に助けられ、すやり霞に助けられ、経験に、年齢にそして画面の大きさに助けられるということです。えてして欺瞞になりやすい個性とか、狭い自己主張に陥ることなく、絵の具そのものの生命に出会うことだという教えます」。

絵描きであった父親と 高校時代の別れと出会い

土屋さんは一九四六年、大垣市養老町で、日本画家の土屋輝雄氏の長男として生まれた。

「父は十四歳の時に雪道で転んで、カリエスという、骨に結核菌がはいる病気になり二十年間闘病生活を強いられました。一日二回膿を抜くという過酷な毎日でしたが、絵が好きで『トンボの翅など細かいところを集中して描く、集中することで痛みが少しづつ遠のいた』と日記に遺しています。二十年も病院にいたから、子どものようにきれいな心で、我儘とは我儘のままから来ているようですが、魅力的な我儘で実に自由な人でした。父は片足が使えず退院してきても家のなかでは匍匐前進するような身体の不自由さのため、むしろ心の自由早くから出会えたのだと思います。スケッチに行くにも母がいつも松葉杖替わりについて

行く、母が行けば私もついて行かざるをえないわけで、いつも絵描きの父が行くところ家族一緒という家でした。父は自分が自由な絵の勉強が出来なかったものですから、私をなんとか自分の跡を継いで絵描きにと、自分の想いを託したかったのでしょう。小学校に入った時から一日一枚絵を描かないと寝かさない、遊びも行けないという特別な父でした。子供の頃は絵を描くのが好きではなく、無理矢理ですから、それがいやでね。でもこの事だけは実に怖い父で、父が亡くなるまで九年間毎日続けさせられました。父は公募展に出品しましたが、落選通知の方も多いわけで、そんな通知が来ると暫く家の中が暗くなるのです。正直に全部出てしまふ父でしたから。食事をしていてもそんな時は旨くないんですよ。絵描きの大変さを見て育ったわけで、私の中では絵描きにだけはなりたくないという想いも一方で育っていました。父が長生きだったら、絵を描いていなかったでしょう。ですが、父を早く亡くした私は、だんだん父がわかるというか、絵しかない、そして生きることと絵を描く事が一緒だった父の生き方みたいなものを、きつと小さい時から、何を感じ取っていたんですね。そんな両面を引きずって美術大学に入りました。日本中から絵が好きで、絵を描きたい連中ばかりが集まってきているわけです。会うといつも絵の話、新鮮に響く絵の話にどんどん





「主基地方風俗歌屏風」 2019年 六曲一双 紙本着色 各縦240.0×横410.0 宮内庁所蔵

引き込まれて行きました。環境が変わった事も大きく、今まで眠っていた身体の一部が急に起き出したかのようで、目の前の自然ですが、生き生きと輝いているように感じたものです」。

若い人に伝えたいこと。 リルケとの出会い

そうした頃、出会った本に『若き詩人への手紙』がある。詩を勉強している若い詩人の卵が先輩リルケに自分の詩を送り、その批評を仰ぐ、往復書簡集だ。「その中のリルケの返事的一篇を、私の記憶を頼りに語りますが、『お手紙をお寄せくださった私に対するご信頼に感謝いたします』というところから始まり、『あなたは私に自分の詩の批評をお求めだが、なかなか批評というのは、難しいのです。物事はすべてそんなに容易につかめるものでも、言えるものでもありません。あなたの信頼に応える為に、何を言ってあげるべきかを一生懸命考えました。あなたの詩の優れた部分を褒めれば、あなたはきっと喜ばれるでしょう。また力のなさを指摘すれば、きっと自信をなくされるかもしれない。私が今あなたに言ってあげられることは、褒める事でも欠点を指摘する事でもないように思うのです。もしあなたに言ってあげることがあるとしたら、それはあなたの最も心が静かな時、私を本当に信頼なさるなら、そ

の信頼するリルケが、「君は才能がないから、もう詩を書く事はやめなさい」と言ったと考えなさい。リルケ先輩がそういうんじゃない「やめよう」と決心がついたら、いまずぐおやめなさい。ただ、誰がやめろと言っても、詩を本当に書きたいなら、あなたが書かずにいられない根拠を深く探りなさい。あなたの最も深いところに根を張っているかどうか調べてごらんなさい。本当に書きたいなら、もう人に自分の才能を問うような事は、おやめなさい。あなたが見、体験し、愛している一番身近なものをあなたが愛しているように、そのまま書きなさい。あなたが失うものの悲しさを、そのまま書きなさい。今あなたに、何もなくても、それでもあなたには、まだあなたの幼年時代があるではありませんか。あの遠い過去の思い出に注意をお向けなさい。あなたと詩が、あなたの内面の必然と深く結びついたなら、その時、あなたはそれがよい詩であるかどうかなど、誰かに尋ねようとは思われなくなるでしょう。私があなたの信頼に応える為に、今言ってあげられることは、この事しかないように思うのです」と、そして最後に『あなたの御信頼に応えるにふさわしい者であったことを祈ります』というような内容の返事でした。本当にそうだと思います。この一篇を読んだ時、感動と共に、とてもうれしかったのを覚えています。我々の身体の重心も我々の身体の中

心にあるから倒れないでいられるように、きつと私を私らしくしている本質、重心のようなものを大切なかかげがえのないものとして、改めて感じたからでしょう。やがて手紙をもらった詩人は志と違うところに進み、詩人を諦める。リルケの言葉に遠い日本の僕に時代を超えて書いてくれたのだと思っています」。

先人たちの教え

その後、土屋さんはさまざまな人や書物との出会いからも、多くを学ばれたという。先人たちの古いものをしっかりと理解していないと、新しい仕事はできない。先人の仕事を知って、自分の考え、根っこが固められてきたと感じている。目標がはっきりしていれば、夜の車窓から見える遠くの月のようにそれはいつまでもついでくる。

「若い頃は日本画や時代に対しての未開拓に興味が多かったのですが、今は自分自身の未開拓に興味に移り、こちらの観方が変われば目の前の未開拓が実に新鮮です」。

アトリエの壁の一角には茶色いわら半紙に大学時代に書いてアパートの壁に貼っていたというダ・ヴィンチの言葉が掲げられている。「Hostinatore rigore」イタリア語で、「飽くなき厳密」の意だそうだ。

「『見の眼弱く、観の眼強く』。日本画は見



ることより感じることに。そこから新たな形や色が生まれてくるということですが、ダ・ヴィンチも感じる形の大切さをいい、人間作為をもつて写し得るものには限界がある。客観的描写の束縛の下に精神の生動を阻害されやすいといっています。ひとつの覚醒を促しているダ・ヴィンチは東洋人と同じような感性を持っていたのだと思います。先人の偉大さに気づくということ。そして、内容もだんだん変わっていきます。私の画面には私の中身が全部現われてしまします。恥ずかしい限りですが自分直しという贅沢な時間も共に授かっています。未来という豊かな誘いに、少しでも踏み込んで納得のいく仕事が残せたらいいと思います」。

日展の今年の作品は、大嘗祭の屏風で描いた嵐山の燃えるような紅葉を正方形の画面いっぱい、心の眼で描く。

洋画

佐藤 哲

洋画家
日展理事

神奈川県南西部、湯河原駅から車で五分ほど、熱海の山間の坂道を上ったところに佐藤さんの三階建てのアトリエはある。緑をわたる風も心地よく、アトリエの外からの見晴らしがとてもよい。大きな空と眼下に広がる雄大な眺めを楽しめる。そうした抜群の環境のなかで、佐藤さんは「現場主義」を貫き、外で大自然を描くことを信条としている。画家への道のりをうかがった。



**自然豊かな大分に生まれ育ち、
大学時代に画家をめざす**

大分に生まれ、大学卒業まで大分に育った。実家は酒屋で、長男であったが、両親からは跡を継ぐようには言われず、教師を薦められたという。小学校のときから物まねの漫画を描くのが好きで、美術の教師がよいかと漠然と考えた。大分は自然が豊かで、田んぼがたくさんあり、フナや鯉やナマズなど、魚をすくって遊んだり、のびのびと育った。高校まではとくに絵を描くということもなく、思い出すのは先生の似顔絵をそっくりに描いて教室で回したこと。高校は進学校であったがマイペースを崩さなかった。大分大学で美術専攻に進んでか

Profile

Tetsu Sato

1944年、大分県生まれ。江藤哲に師事。1966年、大分大学文学部美術科卒業。1975年、第7回日展初入選。1982年、第14回日展「紫陽花の頃」により特選受賞。1993年、第25回日展「黒衣」により特選受賞。2009年、第41回日展「ひととき」により文部科学大臣賞受賞。2013年、第44回日展出品作「夏の終りに」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、東光会理事長。

らは絵を描くことが楽しくて真剣になった。大学では、美術教員を目指して学ぶ日々だった。そこで、恩師仲町謙吉先生との出会いがある。先生は日展に出品していたのだ。日展作家の指導は、その後、才能を大きく開かせることになる。また、現在理事長を務めている東光会の大分支部が開かれていた。当時、大分県美術協会の集まりに、東京から江藤哲先生という高名な先生が来られるということでお会いしたが、もうひとりの恩師との初めての出会いだった。十八歳くらいのときのことだ。

東光会は大分支部の人に勧められて会に入り、仲間や先輩と切磋琢磨して夢中になって描いていた。学生の頃から出品を重ねていた。

当時、描いていた作品は石仏が多かった

という。大分は石仏が多く、三年間石仏を描き、展覧会で受賞するなどして、自信をつけた。

そうして、大学卒業時には、大分を出て東京に行き絵を極めるということを心に決めていたという。東光展のときに江藤先生に「上京して絵の勉強します」と言ったら「それは大変なことだよ」と言われた。大変なこと、それは現実のこととなった。

中学・高校教員時代

大分の教員採用試験に合格したものの、東京を目指すことに変わりはなく、最初に教員になったのは横浜の中学校だった。

中学校の教員には部活動の顧問という仕事があった。バドミントン部の顧問になる

と、そちらに夢中になった。生徒が試合にどんなに勝つていくと、面白くなり、のめりこんでいった。教員の世界では絵を頑張っても評価がなく、生徒と真剣に向き合うことが認められる。面接でも「絵のうまい先生はいらない。生徒指導をやってくれる先生が必要」と言われた。神奈川県内で、中学校と県立高校をそれぞれ2校ずつ替わって、気が付くと生徒指導を中心に行う毎日だった。

一方、絵の方は、学生時代は東京に行ったらうまくなるだろうと思ったが、描けなくなり悩み、止めようかと思うまで落ち込んだこともあった。そうこうしているうちに、同じ大分大学出身で画家でシャンソン歌手の奥様から「自分は絵描きと結婚したのであって部活の顧問と結婚したのではない」と言われ、江藤先生からは「描きながら考えなさい」という意味の葉書をもらい、これが大きな転機となった。

部活動を取ろうか、絵を取ろうかと悩んで絵から遠ざかろうとしたのだが、なんとか絵に戻ったという。県大会で優勝して今度は関東大会というときに部活の顧問を辞めたのだ。「やはり自分は体育の先生ではないということ。バドミントンの顧問をしていたときの東光会の作品は、『会員返上だな』と言われたくらいひどかったのです。大学の友達もみんな気が違ったのではないかと思います。違う絵で、海中のアンモナ

イトを描いたり抽象画を描いたり、色々なことをやったのです」。

そうした時代を経て、絵に専念するようになった。

「中学校教員時代は金沢文庫に住んでいたが、東光会を創立した一人、高間惣七先生の家が近くということもあって、いきなり訪ねて行ったことがある。そうしたら絵を見てくれて、なぜか芸術院の話をしてくださり、アトリエを見せてくださった。今考えたなら、変な若いのが見に来たからといって、よく会ってくださったなと思うのです」。こうした積極的に学ぶ姿勢は、師との関係にも見えてくる。

恩師江藤哲から学んだ 「現場主義」

江藤先生が神奈川の伊勢原に住んでいたため、近くの県営住宅に応募したら当たって、厚木に移り住んだ。三十代の頃のことだ。「先生のような絵を描きたくて、真似ばかりしていました」。

江藤先生は毎年暮れになると犬吠埼に弟子を連れて合宿しており、それに十人くらいで参加した。新聞もテレビもない世界で、絵描きのための宿に泊まり、朝から晩まで絵を描いていたという。

師から学んだのは、「現場主義」。現場で描いて、「自然から学ぶ」ということだ。





「マイルスによせて」
2015年
改組 新 第2回日展



「クインとジュエル」
2012年 第78回東光展

「ニコラス 20」 2006年 第38回日展



これは東光会の主義でもあるが、それを今もずっと続けている。アトリエにこもって描くのではなく、外で描く。人物を描くときも、モデルがなければ描けない。その人物をどこにすえるか。風景は写生に行ったり、静物画にしてもその場にものが無ければ描けない。すべての作品に対する一貫した姿勢である。

広々としたアトリエの壁には、師の言葉が掲げられている。「がっかりしたら絵を描け、腹がたったら絵を描け、嬉しかったら絵を描け、絵描きなら絵を描け」。

先生が亡くなって約三十年になる。先生

たまたま隣に絵描きがいて「大きい家があるから買わないか」と誘われた。いざ使ってみたらこの広さがアトリエに良かったという。

月に一度、絵を習いにくる生徒さんがいる。しかも全国各地からである。こちらに移って十数年、みな高齢になってきた。広島や大阪、大分など遠くから来ている人はとても熱心だという。

作画、着想やテーマについてうかがった。「まとめてパースと描きますからね。割と早いです。光と影が好きなのです」。セッティングによって全体が変わってしまうので、そこには時間をかけている。

屋外で描く時にはいつもイーゼルを立てないで下に置いて描くという。そのため、川越の古い町並みの通りで描いていたら靴磨きと間違えられたという笑い話もあるほどだ。

「やはり身近にあるものでないと描けないです。例えば富士山にしても現場に行かないと描けないし、1回1回キャンバスを持って行かないと描けない。多少イメージを持って描きますけれど、あとは現場に行つてそのまま描きます」

外国への取材旅行にもキャンバスを巻いて持って行つて描いた。荷物検査があるため今は難しいが、巻いたキャンバスを「バズーカ砲か」とジョークを言われたこともあるという。

これは東光会の主義でもあるが、それを今もずっと続けている。アトリエにこもって描くのではなく、外で描く。人物を描くときも、モデルがなければ描けない。その人物をどこにすえるか。風景は写生に行ったり、静物画にしてもその場にものが無ければ描けない。すべての作品に対する一貫した姿勢である。

広々としたアトリエの壁には、師の言葉が掲げられている。「がっかりしたら絵を描け、腹がたったら絵を描け、嬉しかったら絵を描け、絵描きなら絵を描け」。

先生が亡くなって約三十年になる。先生

に傾倒してきたが、自分で考え自分で描かなければと痛感した。82歳で亡くなられる直前に、フランスに一緒に行つて同じ絵を描いたことがある。

「その時の様子、先生が前を歩いていて僕が絵の具を持って後ろを歩いているところを漫画に描いて見せたら、あの先生が初めて笑ったのです。『君は漫画がうまいな』と。すごい先生だけど漫画は描けないからね。僕は漫画を描ける。それだけは褒められた。絵で褒められたのは、『まあいいだろう』というのが最高でした」

高校の美術教師として、日展作家として活躍する佐藤さんのもとには、教えを乞う生徒も現れていた。しかし、その後の転機は、高校教師を辞めたときだ。師匠の江藤先生は役人で、特許庁の課長であつたが、やはり59歳で辞めていた。「普通は絵に専念しろというのだけれど、僕には『教員を辞めるな、生徒指導をやりなさい』と言われて、それで気が付いたら、偶然僕も59歳で辞めていたのです」。教員をやっていたから絵を売らなくて済んだ。熱海のアトリエに引越したのは先生が亡くなってからのことだ。

自然から学ぶ

階段を下りて、アトリエに案内していただと、大きな窓で日当たりがよい、広々

外国人のモデルの絵も大変特徴的であるが、日本人は繊細だから難しいとも。

「黒人の人を描きたいなと思っていたら、たまたま東光展のときに僕の作品の前にはたものですから、それで声がけしました。快く引き受けてくれました」。ガーナと日本人のハーフの女性モデルも、日本で見つけた。年の差がある姉妹で、次女が落書きをしている作品は大分県立美術館に入ってい



「冬の陽」 2017年 改組 新 第4回日展

とした横長のフロアリングの空間で、出品予定の大作が現在進行中である。手前半分は水彩画を描く奥様が使われている。

日焼けをして健康的な佐藤さんは、「現場主義」を貫き、外で描くことが多い。早描きで、二日間描いたという海の絵が立てかけてあった。「去年いちばん暑いときに、目の前の海の水を飲みながら描きました。浜辺に鉄の柵があり、そこにキャンバスをかけてその場でパッと描きました。梅林の絵もそうです。犬吠埼を描いた作品は下塗りをしておいて持つて行つて一回で仕上げました」。風景画から感じられる臨場感や力強さ、エネルギーの秘密が感じられた。

二年後には四季をテーマにした展覧会も予定している。春は梅林。夏は犬吠埼、秋は銀杏並木か紅葉。冬は冬山かどこかで春夏秋冬を狙う。

「僕はものがないと描けない。ものがないと描かないのです。たとえばひまわりは現場の花を持ち帰つて家で大きいものを描いたりします。写真は撮らないのです。撮っても描けないからほとんど現場で描いている。もちろん一日で描けないものもあります」

日の出は、山を下れば描けるし、富士山は山を越えれば見える。二、三十分行けば箱根だ。もう少し年を取ったら庭を描こうと思う。この場所をアトリエに決めたのは、

る。芸術院賞作品もその2人をテーマにした。現在は、日展の作品とともに、十一月の銀座・和光での個展に向けて準備を進めている。「自然に学ぶ」がテーマである。その時に自叙伝を掲載した画集も一緒に出す予定である。また二年後には三越で「四季」をテーマに、その後は大分県立美術館での展覧会と続く予定だ。

彫刻

山本眞輔

彫刻家
日展理事



名古屋駅から東へ三十分ほど、名鉄線に乗り換え、郊外の住宅地にある、白い瀟洒な建物が山本さんのアトリエである。四十五年近くなると思えない手入れの行き届いたモダンな室内には、小ぶりの彫刻作品がたくさん置かれている。応接間のすぐ奥は、柔らかな光が差し込む広々としたアトリエである。代々愛知県に住まれ、吉良上野介の領土の中だったという西尾市の実家は四百坪の敷地に二つのアトリエと保管庫がある。大学時代に東京で寮生活、留学でイタリアへ二度住まいを移したほかは、ずっと地元愛知県で活動が続けられている。これまでの歩みと彫刻にかける思いをうかがった。

「この光が彫刻を制作するには一番いい光です。いわゆるトップライト、天井からの自然光です」

天井高四メートル三十センチある明るい仕事場で、四十五年間制作を続けてきた。大型作品の場合は、回転台に乗せて、横に置いたエレベーターで上がった下がりたりして制作をする。道具は、木べら、鉄べらなどいろいろある。まず実物の四分の一の模型を正確に作る。水平を正確に測るためにはおもりが付いたブラという道具があるが、今はレーザーを使う。そして芯棒をしっかり作り、芯棒ができたときには作品ができていくという。

高校三年で決めた彫刻家への道

山本さんは、一九三九年、愛知県に生まれた。父親は中学校の美術の教師で、校長まで務めた教育者であった。祖父は書を学び日展の阿部珂山先生らと交流があり、墓石に刻む文字を書いていた。こうして、身近に芸術を感じる環境に育った。

「小さい頃から本を読んだり絵を描いたりが好きでした。何か自分の好きなことで、ひとつ一生通じてできることがないかと思っていました」

中学の時には、父に絵を見てもらい、展覧会に出せば評価してもらえた。しかし両親からは教師の道を薦められ、西尾高等学

校の普通科、進学クラスに進む。そこではみな国立一期校を目指していた。父親に「これからは語学の時代だから英語の先生になれ」と言われ、そのつもりだったが、英語の読み書きができるというのはネイティブなら普通である。何がしたいかを考えた。美術が好きで、美術に進みたいと先生に申し出たら、「とんでもない。まず食っていけない」と一笑されたが考えを変えなかった。父の描く絵には絶対に負けろと思いい、絵は描きたくなかった。工作が得意で、電車やラジオの模型を作っていたことから彫刻を学ばうと思った。こうして早くも高校で進路を決めるときに彫刻家になろうと決めてしまったのだ。



国立一期で彫刻を学べる東京教育大を受けることにした。受験は6科目で英数国社理、幾何は満点だったという。昭和三十三年、教育学部芸術学科彫塑専攻に六人が入学。「市村緑郎と同級生で、芸術院会員になるのも一緒でした」

大学では日展の評議員の木村珪二先生に最初から手を取って教えていただいた。大学院、専攻科に行っていたころ、自分の実力を試したい気持ちから日展に出品。しかし、最初は落ちた。二十三歳で初入選、三十三歳で、初めて特選を受賞した。

イタリアの現代彫刻を目指す

大学で夢中になって写実的な彫刻に取り組む中、次の目標が生まれた。

「私たちが目指したのはいわゆる現代彫刻で、今の日展の出発点になっているものです。そうした仕事を日本に初めて紹介したのがフェノロサなどで、明治十七年の東京芸大の出発があります。日本には木彫や仏像などはありませんが、西洋彫刻はなかったわけです。僕が特に興味を持ったのが一九六〇年代にイタリアで活躍したジャコモ・マンズー、ファッチーニ、ヘンリー・ムーア、ジャコモ・メッティなどの現代作家です」なかでもマンズーの作品が好きだと語る。それを勉強したい一心で、一九六八年から六九年にイタリア政府の招待留学生とし

てローマへ旅立つ機会を得た。その資格を得るためにはさまざまな条件をクリアしなければいけなかった。ローマ大学の授業を英語かイタリア語で聞いて理解できる、ある程度の成績を上げている、帰国後、勉強したことを伝達できる機会がある、の三つである。すでに日展で活躍しており実績があった。また名古屋市の職員として、名古屋市立保育短期大学で教員の経験があった。語学については、元々英語の教師になることが条件だったため、高等学校教諭の美術一級とともに、英語二級を持っていた。問題はイタリア政府の試験を受けるためのイタリア語だった。名古屋の八熊教会のエンリコ神父に習い、面接ではラッキーが重なったという。面接官の一人、京都大学の野上素一先生が知り合いで、いろいろ助けてもらい、たいへんな倍率のなか通過したのだ。彫刻で一緒に行ったのは、芸大の教授で新作の山本正道さんだった。そうしてローマに留学し、彫刻家を目指す日々が始まった。

イタリアでの転機。自分の表現を作る

ローマで最初に入ったのはファッチーニ教室である。それが非常に大きな転機になった。

デッサンには自信があった。しかし先生は「こんなものがうまく描けて何になる。



「心の旅 一風に祈りてー」 2017年
改組 新 第4回日展



「いのち巡る」 2013年

を受け、愛媛県にある病院に「我が魂に会うまで」という二メートルの銅鑄型の作品を納めたこともある。「この子たちは自分がどの誰か、社会の一員であることもわからない。でも一生懸命ここに来て病気を治そうとしている。そしていつか自分の魂に会えるときが来る。その助けをするのが医者だ」と言われ、そういうものを表現するのが自らの彫刻だと思ったという。人の願いが込められた銅鑄を用いて、自分なりに解釈し作品にした。

これまで作った作品は三百点ほどにのぼる。海外は世界三十か国ほど回った。作品のモデルのイメージは日本人だけではない。ギリシアのパルテノン神殿で女の子が遊んでいるのを見てひらめいて作った作品もある。山本さんは西洋的な全体のバランスと美しさを重視する。「私の信念として、これは絶対に譲れません。信条は二つ、人生は楽しくなければならない。彫刻は美しくなければならない」。

一般的な、彫刻の見方をうかがった。

「彫刻の理解の仕方のひとつは材料、材質から見る。例えば木、石で彫ってある、ブロンズで鑄造している。そして方法、道具、制作日数などもある。日本ではブロンズが多く、木やプラスチックの材料があります。大理石は水に弱いため日本にはまずない。では石の彫刻はどこに多いのか。イタリアの石の彫刻を見てよかったということに興味を持つ一つのきっかけになる。もう一つがテラマ。例えば目に見えるものをそのまま作った作品。窓辺に立つ女、寝そべった女。そういう発想のシチュエーションを作品から読み取る。もう一つは、作品で何を表現し、伝えようとしているか。彫刻は表現言語の一つですから、それも見方だと思っています。みなさんに彫刻の面白さをわかってほしい。そのためには、若い人が興味をもって、触ってみようかなと思うような、彫刻に接するチャンスを作っていたきたいです」

自らの彫刻家人生を振り返った。

「彫刻家でも職人さんから入って、どこかでお弟子さんになって、江戸時代の以心伝心といった丁稚から番頭までみたいな感じで育ててもらう。一方、僕らみたいに、初めから彫刻家になろうと、しかも現代アートに照準を当て、作家活動の中心に据えてやってきた人がいます。ある意味では学問的な追求からプラス人間の感覚を彫刻でど



絵が上手になったり、そっくりの人を作ったり、それは技術であって彫刻ではない。下手で間違っているいい。自分の表現ができることだ。それを勉強するために来たんだろう。ここでデッサンや絵を描いたりする必要なんかない」と。「今までの私はそれほどばかりやっていて、人体を写すことが彫刻だと思っていたのです」。全部否定されてしまったのだ。

もう一つは師であるファッチーニの仕事と自分の仕事は違うということ。「ファッチーニ先生にはファッチーニ先生の生き方が、マンズー先生はマンズー先生の生き方がある。この人の弟子だからこのような作風があつて然るべきだというのは日本の徒弟制度の名残なのです。現代彫刻ではそういうのがない。それは大きな転機でした。私は今うちの弟子に言っています。『次の展覧会に出す作品は見てくれる人の期待を裏切れ。毎年予想されたような作品を作るな』と」。

こうして、作風は変わり、「私がどう思っているか」が重要になった。「頭が小さくても、手が長すぎても、ときには形が狂っているでもいい。ただ私はここをこうしたいのだということができるシチュエーションを作っていきたい」と。「今でも下手を正當化すると言われますが、そう思われてちっとも構わない。大学時代は先生のもと、市村と二人で泣きながら写真表現をやりま

した。モデルさんの膝だけを同じ大きさで作る。寸法を測るとびったりで、そっくりでしたが、一週間やつても『まだ足りない。膝になってない』と言われるわけです」。こうして身につけた実力がすべての基盤になっているのだ。

その後、もう一度イタリアで学ぶチャンスが訪れた。文部省の在外研究員としてローマのヴィラジュリアでエトルスク美術の修復の仕事に携わった。壺の破片を集めて一つひとつ組み合わせていく。そこでは基本的な部分の表現、構成要素の存在を勉強した。

イタリアとの縁は続き、今も名古屋日伊協会の仕事をし、何度も渡欧しているという。本山政雄市長の時には、名古屋とトリノの姉妹提携のきっかけを作った。その後、トリノ工科大学と名古屋市立大学が姉妹校



「心の旅 一光の舞ー」 2018年 改組 新 第5回日展

になり、教授として彫刻の集中講義を向こうで行ったこともある。

見えないものを形に表す

「眼で見たものを再現するということは、私の彫刻ではない、したくない。私が表現したいものは目に見えないもの。これを形に表すことが彫刻家の仕事だと思っています。たとえば一番よくわかるのは「愛」です。どんなにひねくれたやつでも、ある人を愛してその人のために命をかけるくらいのものだとわかっている。長年続けている「心の旅」シリーズでは、出かけて行った町で私が受けた印象、心象風景を、そこに住んでいると思われる女性に託して表現しました」

藤田医科大学の創設者、藤田先生の依頼

う表現したらいいか、その辺でまとめていくという生き方があるのです。僕はどの先生のお弟子さんというのがないのですが、自分の成長過程で出会った先生はたくさんいます。こういう生き方は珍しいかもしれませんが。結局、僕はものすごくラッキーだと思います。高校のときに彫刻をやったということと設定し、彫刻家になれてしかも今皆さんに作家として認めていただけています」

「祈り」を表現する

最終的には目に見えない「祈り」を彫刻として表現したいと考える。基本的には、どれだけ科学が進歩し文化が進んでも、人は自然を自由にできるといような驕りをもってはいけない。敬虔になるべきだということを経験した人間像でやってみよう。

「ですから変な形になってきますね。『コシチュームは何を着ているのですか』と聞かれますが、言葉で表現できてしまえば彫刻で表現することはないです。僕にしかできない仕事をやっていきたい。それでいて、やはり説得力を持ちたいと思います」

ずっと一筋の道を貫いてきた。「人生をかけて彫刻をやってきた」という言葉が印象的だった。

森野泰明

陶芸家
日展顧問



京都、東山の五條坂は、江戸時代から陶芸の町として栄え、十七、八基の登り窯が並んだ。陶工、卸問屋、小売商が軒を連ね、登り窯の煙の煤で町中が黒くなっても苦情の出ないにぎやかな街だったという。森野さんの家もその地で祖父の代から陶芸家として続いてきた。しかし、五十年ほど前、町中での登り窯が禁じられ、清水焼団地に移った人も多いという。大学卒業後アメリカに渡り、その後も世界的に活躍される陶業六十五年の森野さん。玄関には、特選受賞作の姉妹品という陶器の傘立て、壁には花入れ。応接間では美しい色合いの陶芸作品に囲まれるなか、お話を伺った。

二十八歳でシカゴ大学で 陶芸を教える

森野さんは昭和九年に京都の五條坂で陶芸家の家に生まれた。小学六年生のときには戦争で、丹波の山奥のお寺に半年ほど学童疎開をした。丹波の寺には応仁の乱など都の戦禍をのがれて仏像の頭等が運び込まれていた。当時、食料は十分でなく、野草を摘んで食べ、修学旅行もなかった。旧制中学の最後の世代で、その後、京都市立美術大学陶磁器科に一九五四年入学。富本憲吉先生らのもとで学び日展には四回生の時に入選。一九六〇年には特選を受賞した。専攻科を二年修了後、志願して一九六二年にアメリカのシカゴ大学へ陶芸の教師とし

て渡った。まだ自由渡航ができない時代のことである。
「我々は小学校までは軍国主義で、終戦でコロツと価値観が変わり、それまでの敵国へ羽田から一人で行きました。日本のやきものは、中国や朝鮮半島を通って展開した経緯があるのです。五條坂の人たちからは『アメリカに行っても陶器の勉強にならないではないか』とも言われました」
一九六〇年代のアメリカは凄まじいエネルギーを秘めていた。政治、経済、軍事、化学、文化は力強く、活力に満ち溢れ世界の中で燦然と輝いていた。
同時に、師匠の富本先生は若い時にイギリスに留学したことから、いつも外国の話



を持ち、それで日本の外も見てみたいと思い、アメリカの十の大学に「私を雇ってほしい」という作品のスライドと手紙を出したという。すると三つの大学から返事がきて、翌年の三月にはシカゴ大学にいた。陶器の講座を全部任せられ、三時間教えて、あとは仕事場で自分の作品を制作して展覧会をしたり作品を売ってもいいという条件

だった。英語はなかなかうまくできないが、実技を教える立場だったため楽しかったと、当時の写真やバーナード・リーチからの手紙も見せていただいた。二度にわたり計三年半をアメリカで過ごした。「無鉄砲でしたが、チャンスをつまなげばと思いました」と語る森野さん。そのバックボーンとなるのは五條坂というやきものの町、そして手仕事の町、京都である。京都には各宗派の本山が存在し、仏具などを造るものづくりの歴史が築かれていました。それを支えたのが名もなき職人たちでした。元々は公家文化の素地があって、町衆の力がある。

「滄碧鈞文緑彩扁壺」
2016年 個展

京都の伝統と革新

伝承と伝統は同じではありませんが、伝承は繰り返して、ものづくりに慣れると制作工程が体得でき、ひとつの方程式ができる。そうして安定して仕事ができる。今度はそのブレーキになって次の新しいものに踏み出せないことがある。

「ただ京都のやきものは常に変貌しています。仁清、乾山があつて、磁器は奥田頼川、青木木米、戦後は新しい運動が起りました。今の京都は他府県の人がたくさん入ってきています。かつては、日本各地から職人たちも集まってきました。そのうちに彼らは京都風に同化してしまう。それが京都の文化力といえるでしょう。東京は人や情報が集まってきましたが、京都の一体感のある文化力は全く異質のものです。京都は包み込む力が強いから、他人の血を入れて都市が育っていくのです。実力があれば必ず認められる。同時に伝統的な文化があり、双方の両輪がうまく回っているのが京都で

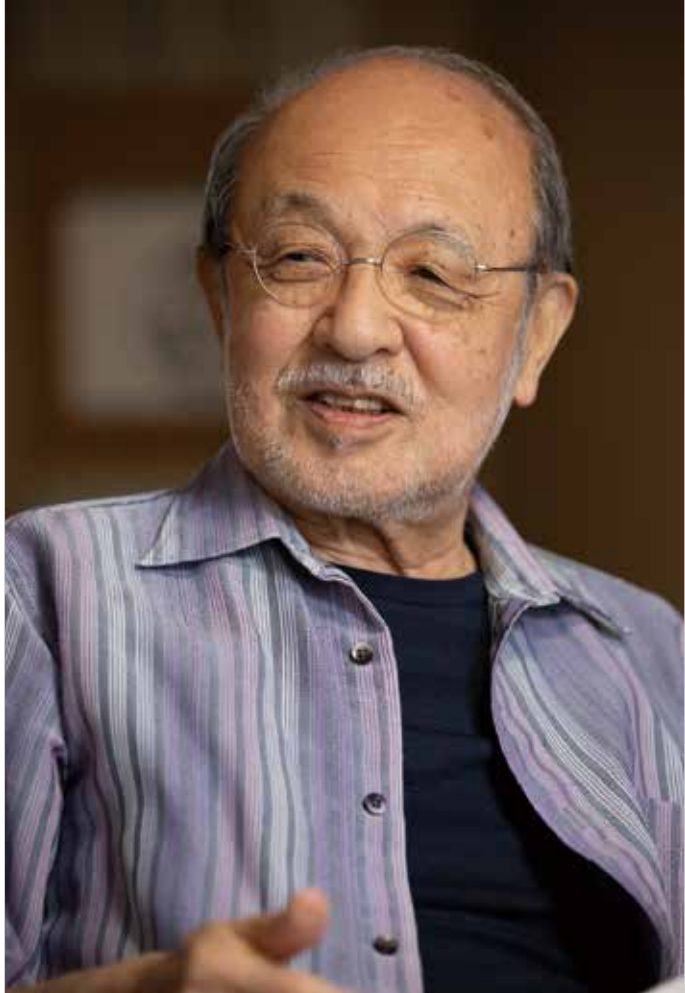
す」

森野さんの話は、五條坂で過ごした過去に遡った。

やきものの町で、周りにたくさん職人さんもいて小さいうちから見聞かしていたことが役に立ったという。コミュニティの中には魚屋、米屋、乾物屋、郵便局もある。その人たちは、もうもうと煙が出て、中で生活しているから文句ひとつ出ない。「雨の日などは軒を這うようにして、タンスの中にまで煤が入るような町だったのです。ただものを作るだけの工業団地ではなく生活感もある。散髪屋があり質屋があり、市場もある。車も自転車もない。江戸時代から続いています」。今はだんだん、そういうコミュニティがなくなつた。

登り窯は京都独特で何軒かが一緒になつて一つの窯を焚く。薪窯を焚くのは窯焚き専門の職人であつて、その結果、焼成後の善し悪しを、窯焚き職人の薪のくべかたが悪いとか、いや、陶工の窯詰めの方が悪いと言ひ争いになることもあった。「登り窯の火が入るときはお神酒を供えてそこに祈りがあつたわけです。しかし一九六五年頃に公害条例ができて、薪窯が禁止されました。私が住む清水焼団地ではすべて電気とガス窯です。

現在、陶芸を志す者は、職人として入っ





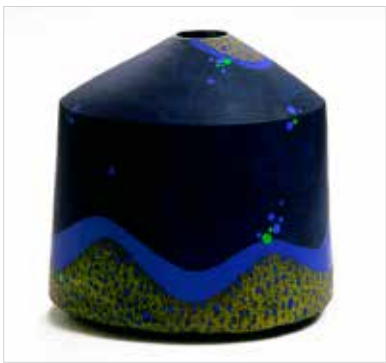
「赫銹弧状文扁壺」 2019年 改組 新 第6回日展



「扁壺『松籟』」 2015年 改組 新 第2回日展



「扁壺『潮路』」 2013年 第45回日展



たり陶芸家について学ぶのではなく、大学で勉強する。私の場合は元々近所全てがやきもの関係です。大きくなったら陶器を作る家業を継ぐと子供時分から思っていて、何の疑問もなかったです。私のじいさんもやきものをやっていた、父もそうで、息子が今やっていますけれど、孫は違うところに就職しました。時代と共に変わってきましてね」。

やきもののなかにある日本人の感性

ご自身の作品については「釉薬の魅力を生かしながら装飾とフォルムとの絡み合いの中で色彩、模様、素材の全てが響きあう一体感のある作品を作りたい」と語る森野さん。

やきものは見て美しさにひたるだけでなく、花瓶や茶碗など、使う行為のいとなみのなかで、手の感触をめぐる、楽しむ。それが日本人独自の美意識である。「お酒のぐい呑やお茶碗も口当たりがいいとか悪いとかいいます。また自分専用の箸や茶碗がある。これは外国にないわけです。そこにも日本人の感性があると私は思うのです」。

昔から言われたのは、土の声を聴きながら、土に寄り添いながら、それを作品にしようという感覚で、これは日本のやきものアトリエで、森野さんがその場で作られた紐は瞬時に均等な幅になった。「均等にいくのは六十何年毎日やっているから。紐づくりによる手びねり成形は、指先で確認する手仕事の集積です」。形を作るのに四、五日、乾かすのに二週間ほど。

材料と友達になることが大切。土の硬さは自分の好きな硬さに手で練ればいい。そしていくつ釉薬を使うか、どんな模様を施すか。次は窯に入れる工程がある。窯の詰め方で焼け方も違う。やきものの特徴は自分の手を離れるということだ。

「たとえばタイルや衛生陶器はムラがあったらいけないからきれいに焼けますが、私たちにとっては変に焼けるほど面白い時がある。それがやきものです。窯に入れたら手から離れる。昔の登り窯だったら炎にゆ

に共通した伝統的なものだという。ところが現代では、産地や材料の扱い方、手法がわからないものも出てきて、独自の表現を強調している。「それは無理もない、時代の流れで、材料と対話するのではなくて、個を大事にしているのですね」。

次に行くべき場所があって工芸

「美術館の中で自立完結するアートがあるでしょう。しかし、工芸品にとって美術館というのは借りの空間で、工芸品であるべきものは次に行くべき、人と交わる空間があつて然るべきなのです。だから、受け手の知識、感性が豊かであつたら跳ねのけられるかもしれない。長谷川等伯の襖絵も絵画であると同時に生活空間を潤す工芸品でした。硯箱でも何でも自分が使う空間のためのものは全部注文品でした。日本の伝統はそこにあるわけです。用の美である。ただ作品を作るときはそのようなことは意識しません。四苦八苦です。考えていたら手が動かない。そんなことで、工芸の概念も変わってきたわけです」。

そして、手の仕事だからプリミティブです。結局、量産できないし、同じものは二つできない。この手が道具なのです。手は何千何百という表現をしてくれる。掴む、

だねなければならぬ。窯出しをして初めて自分で確認する。『やきものなんて他力本願じゃないか』と言う人もいます。しかしそれも計算済みで、この温度で、この釉薬で焼いたらこう出ると、自分の方へ引き寄せて窯に入れるので、窯任せとは違うのです。釉薬を調合して青くなるにはこの顔料を入れて、何度で焼いたら出ると。二重に釉薬をかけた場合には下からブルーが浮き出て来る。真っ黒よりも深みがある。そういうことを頭に入れて、自分なりの経験をもとに作業をするわけです」

「もう一遍やるか」の気持ちで六十五年

制作の発想と原点を尋ねると、「キザに

空手など武器になる。ネジを回せる。手で触るとわかる。指先はものすごく敏感で貴重なのです。字は書ける、ものは持てる、仕分ける、創造精神が働いたら創作ができる。こんな便利な道具はないです」。

紐づくりとオリジナルの釉薬

ギリシアから帰ってきたという作品扁壺「潮路」がまだ箱に入ったまま居間に置かれており、開けて説明してください。全部一面にブルーの釉薬を施して、その上に黒の釉薬をかけるから下からブルーが出てくる。また作品の別の場所は、黄色の下からブルーが出てきている。ブルーを際立たすために、ロウで抜き、他の釉薬がからないうようにする。波文は全体の形から模様のにこれくらいの分量が必要と見極めていく。

釉薬はトルコブルーなどのブルーが二色、さび色、赭色、黒色の五種類を二重がけにし、違うパターンや色を出すという。「土を触り造形を作るのは基本的に決まっているので、装飾の部分でいかに新しいオリジナルの釉薬を作るかです」。

ろくろではまん丸になるが、紐づくりではどんな形でもできる。「日本人は歪んだものが好きで、茶碗でもちょっと歪んだものに味があるとかいいます」。

言ったら、素材があつて自分との対話のようなものだね。自分の作りたいものを作る。失敗もある。だから続くわけです。窯の失敗もあるし、窯に入れる前にちよつと傷がでたり。失敗があるからもう一遍やるか、と六十五年続いてきました。満足してうまいこといつていたら続かないです。たくさん出来損ないがあります。それが面白いもので、出来損ないと思つて置いておいたら、日が経つたらよく見えるときがある。そんなものです。絵描きさんは最後に筆を置くときに迷う。私などは火の神さんにまかせなければならぬ。どこで仕事をして、京都でもアメリカでも工程は一緒。窯から出すときは楽しみであり不安。よかつた、というのはそうはないのです」。

かつて座右の銘は「不日堅乎、磨而不磷（堅しと曰わずや磨すれど磷がず）」。堅いものはこすつても薄くならないという意味の論語で、「自分さえしつかりしていたらどんな環境に置かれても自分を見失うことがない」だった。今は単純に「命より健康」。健康ですつと仕事をするのである。

森野さんは膨大な作品写真の整理やメールもご自身でされるという。「健康の秘訣は食べ過ぎないこと。目標は米寿展。元気だったらいつまでもやりたいと思います」。終始笑顔で語ってくださいました。

星弘道

書家
日展理事

江戸時代中期の旗本、「鬼平犯科帳」のモデルとなった長谷川平蔵の供養碑がある日蓮宗戒行寺の住職を務める書家の星弘道さん。寺は十七世紀に麹町から四谷に移り、家光の拝領地が当時は三千七百坪であったという。宇都宮に生まれ、数奇な運命の元、大学生だった二十歳のとき、最年少で四谷の寺の住職を引き継ぎ今日に至っている。

朝は寺のお勤めがあり、午後から過ごされるという台東区のアトリエでこれまでの歩みを伺った。



高校三年、大学受験期に運命が動く

星さんは、宇都宮の砂糖問屋を営む家で五人兄弟の次男として生まれた。十八歳で高校を卒業するまでは実家で過ごし、大学時代からずっと東京である。二十歳で住職になられた経緯をうかがった。

「四谷のお寺の住職が、昭和三十八年二月十日に亡くなられたのです。私が大学受験の時でした。お坊さんになるつもりは全くありませんで建築関係に進もうと理系の勉強をしていたのですが、お子さんのいなかった住職の後を継いでもらえないかという話がきたのです。縁戚ではありません。両親はお寺のことは何もわからない。それほど檀家が多くないので、土日に法事が勤

められるくらい感じで大丈夫だから、好きな建築の方に進んでもいいという条件だったのです。なんとか考えてみようということになりました」。

住職になるには出家得度といって剃髪するときに必ず師匠をつけなければならぬ。四谷のお寺の法脈から、師匠は厚木の本山の貫主様だとわかり、すぐに伺って話を聞くことになった。しかし、軽い気持ちで行ったところ打ちのめされた。まず大学は宗門の大学の立正大学仏教学部に進み、その方の息子さんのお寺が麻布にあるのでそこで修行しながら立正大学に通うこと。二足のわらじを履くようないい加減なのはとんでもないということになった。話はだいぶ違う。高校三年の受験期にたいへんな決断を

迫られた。

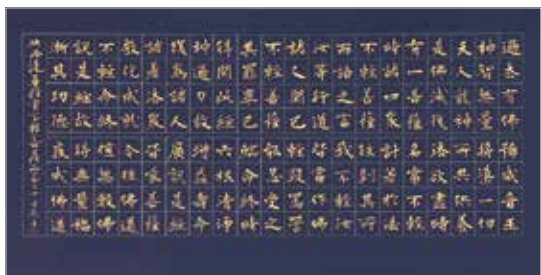
しかし、いろいろ考えたうえ、立正大学を受験し仏教学部に入学。「学校では、とにかく仏教用語もなにもちんぷんかんぷんで、他の人たちは寺の息子が多いですから、『立正安国論』など、ある程度そんな言葉くらいはわかっていたのだと思いますが、私は、最初はいへんでした」。

寺では毎朝四時にたたき起こされて、先輩僧と一緒に出勤をして、終わると作務といって外と中を全部掃除し、やっと八時くらいに朝食をいただき、身支度して学校へ飛んで行く。授業の時間表を提出しているため、すぐに帰って来なければならぬ。帰ってきてからもいろいろと作務をやって、夕飯を食べて一日が終わる。「結局、

学生時代、時間を作るには授業をさぼるしかなかったのです。毎日毎日そういう生活で、なぜ僕はこんなことをやっていなければならぬのか。辛いこともあるし、あまりに世界が違い過ぎるということもあって、ダメかななんて思うときが何回ありました」。

師匠に導かれ最年少で住職に「随処に主となれば、立処みな真なり」

しかし堀日榮さんという立派な師匠に支



「妙法蓮華経」 2020年

えられた。『法華経講話』を出されている学者でもあり、仏教のことなどいろいろ話をしてくれた。「そうして、坊さんというのは大変な仕事だけれども、やりがいがあるかなという感じにだんだんなってきたのです。師匠が千葉の清澄山という、日蓮上人が生まれて得度した大本山の別当様になられたので、学校が休みの時はそちらに行って作務を手伝いました。本当にがんじがらめになった状態で、青春ということがあったのかどうかわからないようなことでした」。

そうして大学三年まで麻布の寺にいて、その間三十五日間の修行を身延山で行い得度し、最年少で四谷の寺の住職の名義を継いだ。

座右の銘は、得度の時にもらった師匠からの言葉で「随処に主となれば、立処みな真なり」。今置かれた自分の環境、立場、そういう状況の中で最善を尽くすということ。「結果を最初に求めるのではなくて、一生懸命与えられた場所でやりなさい。それからいろいろ結果がついてくるということ、今でもそういう気持ちでずっとやっています。書家になるつもりも坊さんになるつもりもないしで、我が人生は流された人生という感じです」とほほ笑む。この座右の銘は大きな糧になったであろう。

子どもの頃一番かわいがってくれた祖母が日蓮宗の大信者だった。実家は曹洞宗で

禪宗だが、その仏壇の隣には日蓮さまの仏壇があった。「そういう環境だったから、日蓮宗のお坊さんになるようになったのか、祖母がいろいろ教えようと思ってやってくれたのでしょうか」。そこにはひとつの因縁のようなものを感じるという。

荒行で出会ったすばらしい文字

大学を卒業すると、日蓮宗では荒行という修行がある。十一月一日から二月十日まで、下総中山の法華経寺に全国から五十人ほど集まる。一步も外へ出ず、百日間、寒い時に水ごりをとって、一日三時間程度の睡眠で、お経をあげ水をかぶりお経をあげ水をかぶるとい修行である。毎食おかゆ一杯と味噌汁、たくあん程度で過ごす。栄養失調や睡眠不足、死んでも異議申し立てしないよう誓約をし、医者診断書も付けて覚悟のうえで志願していく。それだけ厳しく、五回の修行で成満すると一番上の修行僧の位がもらえるという。若く何も分らず、ただひたすら飛び込んで行った世界だったという。

この修行中に、初めての書との出会いがあった。三十五日間の自行の後、麻の衣の上に割烹着を着て「法喜堂」というお堂で食事を作る係になった。そのときエプロンに「法喜堂」と墨で、すばらしい字が書かれていた。書というのは結構人を感動させ





ような字です。しかし良寛さんが習っていないかというところによく習っている。そこを通り過ぎていくところに本当の意味でのいい書がある。料理でいえばいつまで食べても飽きがこない、書でもいつまで見ていても飽きがこないような書であって、もっと人に訴えてくる力のあるものができたら、それが一番難しい世界かなと思っています。技巧的なものに走るのではなく、自然に書いて、それでいて何でもない。禅問答ではないですけど、何でもなく書いて何でもある存在の字が書けたらいいんじゃないかなと。かざりをそいで、そいで、そいでいく。僕も七十五歳になりますから、そんなものが少しでも表現できたらと思います」。

今パフォーマンスのような書が話題になっているが、それだけではないということとを、世の中の人にも見ていただきたいと語る。



「萬物之鏡」 2014年 茨城県庁蔵

るものがあるなと感じた。

後にその文字は、相田さんという、日展に入選した先輩僧が書いたものとわかった。浅香鉄心先生のお弟子さんだった。仏さまにあげる書がお粗末では申し訳ないと考え、「是非教えてほしい」と訪ねたところ、東京の寺で若い僧侶を集めて指導してくださることになった。ひたすらみなで競争しあって書いた。相田先生が体を壊してから、浅香先生が教えていた東京の王子に行くよう言われた。浅香先生は日展で活躍された先生で、日展や読売、毎日など公募展を勧められ出すようになった。

三十歳のときに日展に初出品初入選。三回目に落選したが、その後十五回ほど入選し、四十五歳のころに特選をもらった。その後一九九二年に二回目の特選。委嘱になった。しかし、そんな恩師である浅香先生が一九九七年に亡くなった。「先生がいなくなるとこの世界はたいへんなのですが、どういう立場であっても一生懸命やって、いい作品を書くように心がけようとただひたすらに思っていました。結局見てくださった先生方のおかげで会員賞、大臣賞をもらって、芸術院賞まではなんとか六十代で行き着いたという感じです。いろいろな巡り合わせに感謝しています」。

その間、書を極めるには漢文・漢詩をどうしても学びたいという若い僧侶の声もあり、大東文化大学の猪口篤志教授をご紹介します。

いただき、十五年ほど寺で教授いただいた。「有名な先生がついて直していただく」と漢詩というのはものすごくよくなるのです。猪口先生は今という儒者で人間的にも立派な方です。私はお坊さんの師匠に恵まれ、書道の師匠に恵まれ、漢詩の師匠に恵まれ、そういう面で本当に恵まれた生涯です」。

現代書道二十人展は今年で十五年目になるが、東京国立博物館に特別に展示された第五十回のときに選ばれた。「有難いことで誰かが見てくれたのでしょうか。この展覧会の六十何年の歴史で、書家がまだ二十人しか選ばれていないと思うとすごい事なんだと思いました」。

なんでもなく書いて なんでもある存在の字

作品を書く時には、自分で撰文してこの詩と決めてから実際に毛筆で書いてみて、これなら作品になるというものを書くようにしているという。

「僕はあまり草稿を作らないのです。きちんと作ってそれを縮小拡大して納める先生もいるのですが、制約が加わるといきいきしたものが書けなくなるのです。その時にぶつかった瞬間から筆の様子をつなげていつてという感じで書くのです。文章だけは拾いますが、それをいろいろと書いて、

文化を残し守るということ

四谷の寺は、昭和二十年に戦災で焼けて、三代かかってやっと復興できたという。「年中、客殿や会館、仏塔を作ったりということをやっていたので檀家の人にはトンカチ住職なんて言われます」。

麹町から四谷に移転した十七世紀、家光の拝領地が三千七百坪だった。今ではだいぶ小さくなったが、先代の住職が経営のために土地を貸してしまい、五十何年間、買い戻しを進め、寺に貢献した。昔の大名寺なので檀家は少ない。明治維新で武家が平民になり大名寺の維持はたいへんになった。「何だかんだといっても国宝などの文化的なものを信仰の力で守ってきたのはお寺です。そういうことも考えていただけるとお寺も嬉しいと思うのです。こちらは家康の側室のお万の方が建てたお寺ですが残念なことに戦災で全部焼けてしまいました」。

長年、走り続け、寺に貢献し、書に打ち込まれた。毎朝、寺のお勤めの後、午後からは浅草橋のアトリエで、お弟子さんたちの稽古をしたり、『龍賓』という書道の月刊誌の仕事をする。全国の会員が習字を習って投稿し、優秀な作品を紹介するもので、浅香先生が亡くなってから二十年ずっと続いている。

「古代中国で木片に墨で書かれた「木簡」は今もそのまま残っています。墨は腐食も

これでいけるとなったら、今度はそれに集中するやり方で、結構失敗も多いです」。

実際に書いてくださった。躊躇なく、勢いをもって筆が進む。「こうやってどんどん書いていくのですが、その中でも感触が『あつ。よしこれでいいかな』というのがあるのです。ただ、あとで乾燥によって墨の色が変わって来ます。次の次の日くらいまでは結構化けるのです。見てこれで大丈夫となったらこれに印を押して出そうとなるのです」。湿度の高い日は、紙が湿気を持つと墨がにじむ。それも計算に入れて書くという。

数多くの印も見せていただいた。大小、実に多種の印があり、作品にあわせて選ぶという。

「書は奥が深いです。一生かかってもどこまで行かれるのかわからないです。芸術でなくても、みなそうですね。ここがいいというのはいから生涯現役でやり続けるよねではないでしょうね」。

これから書きたいものを尋ねると、良寛の話をしてくださった。「良寛さんが料理人の料理と書家の書は嫌いだということを言ったといいますが、良寛さんほど達観した世界に入っている人になると、料理人の料理は型が決まってしまうというか。書家でいえば技術的にできあがってしまったということがあるんだと思うのです。良寛さんの書は稚拙な表現をして、子供が書いた

防止します。周りは腐ってへこむのですが墨で書いたところだけが浮き出ているのです。今中国とのいろいろな問題があるけれど、日本の文化は中国を学ばなかったら何も出てきません。中国の三、四千年の歴史というのはすごいなと思います。これから日本独特の考え方で残していけばいいのでしようけれど、我々がこれからどうやって自分のものを残していっていいのか、いろいろ考えなければいけないと思っているのです」。寺を守り、書の未来を考え、星さんの「随処に主となれば、立処みな真なり」の道は続く。



「いのち」 2020年

日本画

大西健太

日本画家
日展会友

京都から快速で三十四分、琵琶湖の東側にあたる近江八幡の駅から歩いても十五分ほど。煉瓦でデザインされた、瀟洒な建物の半分はご実家が電気関係の事業を営まれている。ご自身の車は白いアメ車風のトラック。後ろの荷台の中はきれいな薄いピンク色で塗られていた。人物とグラフィティを描いて京展で京展賞。柔らかな色合いで人々を癒す作品を生み出す作家の思いを聞いた。



中学校に行ってから、そうした絵を頼まれることになる。豊かな自然に囲まれて、自由な少年時代を送った。美術部には入らなかったが、部活でソフトテニスに明け暮れた。しかし、文化祭や体育祭は大西さんの絵で活躍した。思い出深いのは高校三年のときのこと。「体育祭でベニヤ板十枚に一匹の龍を大きく描いたんです。僕が家の倉庫で下書きを描いて、夜にみんなで集まって色を塗ってもらったりしました」。

巨大な作品を、締め切りに間に合わせるために朝まで徹夜で描いて、できあがったものから順番に持って行く。最後に十枚を並べて丸太でパネルをくくって皆で起こしたのは感動的だった。画材はアクリルやペ

ンキで、日本画の岩絵の具は大学に行くまで全く知らなかった。

テニス部の活動は夏の大会で終わり、九月の体育祭の頃、進路はまだ決まっていなかった。考えた末、好きな美術に進みたいと思い、先生に相談すると、その頃の美大は倍率が高く、まず無理だと言われた。両親は理解してくれて案外すつと賛成してくれた。ただ周りは商売をしており、友達は皆芸術系以外の大学という道で、絵が得意なのはわかっていたがあまり理解されないところもあった。しかし、自分には絵しかない。情熱を信じてそこで力試ししたかった。

早い人は高校一年くらいからデッサンを始めていたが、自分は全く自由に描いてい

文化祭でまかされた巨大な龍の絵

天井が高く、上部には美しいステンドグラスのある応接間の一画を現在アトリエとして制作をしている大西さん。自然が豊かな滋賀県・近江八幡で生まれ育ち、まだ本当に小さいころから四歳ころまで、チラシの裏などに落書きばかり描いていた子どもだったという。自分で考えた妖怪やイメージキャラクターなどをクレヨンや水性ペンで次々描いていた。それが体に残っていたのか、小学校に上がってからは体育祭や文化祭などの看板をいつも描いていた。応援チームのイメージキャラクターを描いたり垂れ幕に絵を描いたり、絵が得意な少年

Profile

Onishi Kenta

1981年、滋賀県生まれ。2004年、京都精華大学芸術学部卒業。2006年、京展 京展賞。2009年、第41回日展 初入選。2012年、第44回日展 特選。2013年、第48回日春展 日春賞。平成25年度 滋賀県文化奨励賞。2014年、公募団体ベストセレクト シン美術2014 / 東京都美術館。2015年、改組新第2回日展 京都展 京都新聞賞。2016年、伊勢神宮式年遷宮記念 神宮美術館 特別展 人歌会始御題によせて。2018年、第2回新日春展 新日春賞・山口達春記念館賞。現在、日展会友、新日春会準会員、京都日本画家協会会員。

ただけだった。高三の秋から本格的にデッサンを始めた。ほとんど独学で、必死に勉強し、現役で京都精華大に合格。皆びっくりされたが自分でもびっくりしたという。

自由に自分のスタイルを描きたい

専攻は、洋画か日本画を考えたが、細かく描くのが好きだったので、結果として日

本画が表現にあっていたと振り返る。大学は家から通える距離だった。

高校までは楽しく描いていたが、大学に入学するとそうはいかなかった。一、二年生は基礎で、まずは日本画の絵の具を使って、徐々に大きな作品を描いていく。モチーフは動物や鳥と決まっており、課題をこなすリズムについていけなかった。「僕もずっと自由に自分のスタイルを描きたいというのがあって十代のころから好きだった音楽やカルチャーのほうに向いてしまっただけです。大学では優等生ではなかった。しかし、やはり何かに挑戦したかった。三年生から自由課題になって、自分のスタイルを入れやすくなった。日本画を学ぶことが貴重な経験だと気が付いたのは、三年生の終わりころだ。そこで初めて自分の好きなモチーフを大きく描いた。「アメ車を日本画表現に取り入れる難しさはありましたが、比較的自由に描かせてくれた大学だったので、そこにすごく感謝したいな」と思っています。いい意味で放って置かれるというか、エントランスで自分で自由にアメ車を百五十号で描いて、初めて公募展に出品し、二〇〇三年の京展で初入選しました。それらもびっくりして、完成させるのは大変なことだけれど、やればやるほど楽しくなってきました」。

大学を出てから日展との出会い

こうして京展には四年間出し続けたが、二〇〇四年に卒業し大学から離れることになった。大学は描くことが認められている本場にいい場所だが、一步社会に出るとなぜ絵を描いているのかと言われ、別の仕事の人からあまり理解されなかったり、環境整備に苦戦しそのような闘いが続いたという。しかし、絵を美術館で発表するにつれて、「感動しました」という声もあり、徐々にわかってもらえるようになった。

卒業後は日展に初出品したが落選、家業を手伝いながら続けた。公募展の場合、絵が大きいので、できるだけ絵に時間を費やせるようにしたが、最初の三、四年は両立が難しく出せない時もあった。仕事と絵の両立は簡単なものではない。自分を信じ日本画の道に専念したいと強く思い本格的に日展に出し始めたのは卒業後三年ほど経ってからだ。不特定多数の方にとくさん見てもらえる大きな舞台にもう一度挑戦し始めた。しかし、二回落選が続いた。

やはり何か強いものが届くのではないかと思います。二〇〇九年に時間をかけて構図を練って出した「HANAMICHI」が初入選となった。

「自分を貫くことはとても勇気が必要ですが、卒業後はずっと一人で制作してきました。その間に辞めていく友達もいました。





「FREE SOUL」
2015年
改組 新 第2回日展



「EARTH」 2012年 第44回日展 特選

やりたくてもできない環境もあると思います。モチベーションがしんどかったりもしたのですが、徐々に仲間もできてきました。温かく応援してくださる先生方、切磋琢磨するきっかけになる横のつながりや周りの方々に感謝したいと思います。絵は描けば描くほど難しいです。その難しさの中に身を置き続けられる事は幸福だと思うようになれました」

昨年よりカルチャースクールで、日本画を教えており、それもよい経験になり自分の糧になっているという。

二〇一九年は地元のかわらミュージアムで、卒業制作から今日まで十二点の大作を二カ月間展示する企画展の機会を与えていただき、自分を振り返るよいきっかけになった。十二点の作品は自らがトラックで運んだ。展示では仲間の協力を得て、初めての個展は地元の各社新聞でも取り上げられた。

音楽やほかのカルチャーから影響を受けて自分のフィルターを通して描く。二十代はロックを聞いていた十代の頃の刺激がずっと続いたと振り返る。大学では怒られてもいいから好きなように描き自己表現をした。しかし、根底には常にあたたかなメッセージを込めた。

ニューヨークの貿易センタービルで9・11があった年に卒業制作を描いたが、このときも百合の花を描いた。日々の平穩への願いと、理想を求め純粹に絵に向き合いたいという一つのシンボルとして描いているという。

グラフィティというテーマが日本画表現によって発色や色味が優しくなる。そのアンバランスさを狙った。落書きは外ではないが、メッセージを込め絵の中なら自由に見える。同年代への表現の自由をテーマにした。日展の初入選もその流れをくむもので、次の年は落ちて二〇一一年で入選、三回目に「EARTH」で特選を受賞した。

二〇一八年の「約束の地図」は、地図を舟に見立ててみなで共に進んでいる姿を描いた。音楽と違い美術は一人ひとりのプレイ。しかし、団体やもっと大きな世界で見たら、ひとつの時代をみなで進んでいる。舟形の地図にいつもの少年を乗せて描いた。「百人いたら百人の絵があるので、それぞれのストーリーが集まる。これが五科ある。このような大きな展覧会は珍しいの

美術館を癒しの場所に

そもそも日展との初めての出会いは、大学の日本画の授業の一環で見に行った時だ。五科ある展覧会を見たのは初めてで、当時は若かったので、ちょっと別世界な気がしたという。「少し遠い存在でした。美術館にもう少し若い子がライブに行くような感じで、あの作家が出ているから見に行こうと思えるような、敷居をもっと低くしたいというのがあります。僕は音楽が好きで、そこには若い人が多く集まります。伝統ももちろん大事でそこに敬意をはらって核心に迫るような、若い世代にも響くように、もっと広がるようにしたいと感じました。そして、美術館を癒しの場所にしたい。絵や音楽は日常から救い出してくれます。少しでもいいので、そこに親しんで、軽やかな気持ちで日常に帰っていただけるような作品を描きたい」。

二十代はグラフィティやストリートカルチャーをテーマに描いていたが、日展に出始めてからは、根底にある絵の中の平和や自由は同じだが、モチーフが変化してきたという。子供を通じて希望や明日への活力、糧などを表現したいと思うようになった。「不特定多数の方が来られる展覧会なので、同じ伝わるのだったら光あるような温かいものがいいなと思って、徐々に変わってきました」。

で、もっと若い人にも来てほしいです」と日展への願いを込めた。

伝わることの責任。 絵でプラスに変換する

「少しでも人に寄り添うような。一人でも人に伝わるあったかいメッセージを込めた作品を描いていきたいというのと、毎日ハッピーなことばかりではないので、少しでも闇を照らすような表現ができるように新たな挑戦を秘め精進していきたいと思います」

緩やかに、自然ばかりの環境でマイペースに育って、今を生きていると自らを振り返る。同じ伝わるのなら、自分が暗くてもプラスに変換したい。伝わることの責任も

震災をきっかけに

そのきっかけは、二〇一一年に人物を真正面から描いたことだ。それまでは後ろ姿でスケボーに乗っている人物や巨大な壁に落書きしている後姿の人物を描いていたが、三十歳頃、正面から人物を描いてみようと思い、挑戦した。真正面から人と向き合うとごまかしがきかない。ちょうど震災が起きた年。美術の力でどういう作品が描けるのか迷いもあった。なぜか世界地図をバックに子供が立っている構図しか思い浮かばなかった。その年に描いた作品は日展出品作に「ONE WORLD」と題して祈りを込めた。

二〇一二年の作品は「EARTH」で、百合のタスキをした少年が描かれている。震災だけでなく、世界では大変なことがあるが、希望に変わるように、平和への願いを込めて描いた。少年は中性的に描くことで、絵の中に隙間をつくり、いろいろな気持ちが入り込めるように考えた。背景のイメージは、宇宙の世界観のような、たとえばクジラや少年がいて虫やホタルが飛んでいた、魂の循環のようなイメージで宇宙感を出そうとした。地面に座ってそこに花が咲いているという何気ない風景を幻想的に表そうとしたり、さまざまな試行錯誤を重ね、イメージの創造で絵を作ることが多くなってきたという。

考えるようになった。暗く見えないトンネルで叫ぶのではなくて、いろいろな人が来られる中で、少しでもあたたかな気持ちで帰ってほしい。心の錆びたところやメッキを剥がすような、そういう芸術の可能性を信じて大西さんは制作を続ける。

「震災やコロナ感染症があって、直接絵がそこに働くことはちょっと難しい。まずは人間としての行動、人間力が問われます。その後に芸術や文化の力が生きる。心の復興のような、心の免疫力を高めたり、絵でしか伝えられない言葉にできない何かが芸術の力にあるのではないでしょうか。先が見えない今この時代だからこそ祈りを込めて絵と向き合いたい」と大西さんは考えている。



「約束の地図」 2018年 改組 新 第5回日展

松本貴子

洋画家
日展会友

大阪のベッドタウンともいわれる奈良県の生駒。駅からならかな坂道を上っていくと、ケーブルカーが通りの向こう側を走っている眺めの良い場所である。白を基調とした新しい家は松本さんが設計に携わったという。応接間では五羽の文鳥が放され自由に飛びかう。ウィリアム・モリスやイギリスの作家のポスター、アンティークな家具など、好きなものに囲まれた、天井の高いアトリエで話を伺った。東京・上野に生まれ世田谷に育った松本さんは、結婚を機に移り住み、現在この地で制作活動が続けている。



芸術に理解のある家庭で育って

上野のそばで幼少時代を過ごした松本さんは、当時、科学博物館がお気に入り入りの場所だった。恐竜ブームの頃で、幼稚園に入る前から、恐竜の図鑑を模写していたという。六歳の頃に世田谷に引っ越した。絵が好きで、将来は漫画家かイラストレーター、あるいは音大出身の母の影響で声楽も習い、絵を描くか音楽をとるかという選択だった。また、祖父が芸術に造詣が深く、コレクターでもあったという。横山大観などの日本画が中心だったが、洋画も含めさまざまな作品が身近にあった。「祖父が生きていたら、日展に出品していることを喜んだと思います」。また、実家は徽章やバッザ、メダル

を製作する老舗。父親がデザインをし、その下絵を手伝うということもあった。そうした環境は大きかった。「桐朋女子（仙川）に初等部から通いました。高校では受験用に美術の授業もデッサン特化のカリキュラムがあり、厳しく鍛えられました。石膏デッサンがとても好きでした」

ごく自然に五美大を受験して女子美の油絵科に進んだ。相模大野のキャンパスはぎりぎり家から通えた。

しかし、大学時代は抽象画を描いていたという。本来描きたかった写実の先生がいなかったのだ。途中、摂食障害という辛い時期を乗り越え復学し、七年がかりで卒業した。

その後は、フリーランスでパソコンを使って絵を描き、ゲームのクリエイターとなり、キャラクターデザインなどもした。さまざまなご縁に導かれてこうした仕事をすることができるようになったという。

カルチャーで油絵を勉強しなおす

絵と関わりながら過ごすなかで、もう一度デッサンや油絵をやってみたいと思うようになった。そこで近くのカルチャースクールに通うようになったのが十五年ほど前のことだ。そこで、当時白日会に所属していた日展系の先生と出会い、導かれる。二〇〇九年に白日会に初入選となった。その後、「日展はいつ出すの？日展向きだか

ら頑張れ」と先生方に言われ、そろそろ出してみようかという、いろいろなきっかけがあった。

年に二回の大作を描くのは、骨が折れることだという躊躇もあったが、自分なりに目標を決めて、自らを奮い立たせて頑張った。「指導してくださる先生方に助けられながらやってこれました」と振り返る。

「日展に所属して感じたのは、他の会派の先生方でも、ご講師をお願いすれば気さく

にアドバイスをくださって、もちろん畏まって拝聴するわけですが、同じ時代、共に同じ作家仲間同士、美術界を、日展を良くしていくこう、切磋琢磨していこうじゃないかという瑞々しい共通意識がある気がして、そんなものが垣間見える瞬間がとてもありがたいです。また、ある意味、この世界も人と人とのご縁、つながりでできていると痛感します。引きこもって絵だけ描いていけばよいわけではないですね」

こうして徐々に絵の比重が大きくなり、デジタルの仕事との両立は難しいと感じた。プロジェクトの拘束時間が長いデジタルの仕事に意識をとられながら油絵のほうには描けないということ、十年ほど前に油絵に専念し始めたという。賞をいただいて小品を発表する機会も増えていた。そして、二〇一一年に結婚して奈良に移り住んだ。

好きなものに囲まれたアトリエ

アトリエの中は、ヨーロッパアンティーク、イギリス風な家具や小物が置かれ、作品ポスターなども飾られている。

「中世ヨーロッパ的なものの、ルネサンスから始まって古典や十九世紀末の写実絵画、ヴィクトリアンやラファエル前派が大好きです。わかりやすい具象といえますか。学生的时候は写実ができなかったので、十年二十年経つともう一度、元々好きだった古

典絵画の世界で、やはり人体をきちんと描くことをしたくて、その留飲はイラストの方で下げていく感じでした」。イラストやゲームのキャラクターデザインもきちんとリアルなものが要求されるところで仕事をしてきた。インスピレーションの源はファンタジーや『指輪物語』などの小説や映画、ミステリー、オカルト、占いなど。ライブに行つて音と光と色の組み合わせから得ることもある。音楽は長年アルフィー一筋だが、ルーツはクラシック。仕事中は平均律とJ・ゴールウェイのフルートをよく聴いている。オペラや歌舞伎といった舞台も好き。家庭は芸術に対して恵まれていた。体は弱かったが、興味を持つものにはゲームも漫画も規制なく、自由に心豊かに過ごせる環境だったという。すべてが今の松本さんの発想の引き出しになっている。

タロットやゲームからのインスピレーション

制作過程についてうかがった。「大作は舞台をきちんと作ることが多いです。頭の引き出しを開けつつ、その時興味を持った題材や、惹かれたテーマを組み合わせます。象徴としてタロットカードそのものを描いていたのですが、最近では画面構成自体も一枚のカードのイメージで描いています。ラテン語の文字やメタファーやアトリビユー





「小さな祈り」 2018年 改組 新 第5回日展



「夢」 2018年 第94回白日会

いい絵を描く作家をめざす

「今後はウイズコロナという時代で美術界の在り方も発表の形も変わっていくと感じています。作家にも様々なことを求められるかもしれませんが、不器用な私は『その時代に楔を打つ』ことに忠実に、愚直にやるしかできないかなと。『いいなあ』と思われる絵を描きたいです。技巧や上手さだけではなく、『いい絵』を描く作家に成熟・深化していけたらと思います。昔の自分がラファエロやダ・ビンチを見て『絵っていいなあ』と思った純粹な感覚を自分が提供できたら、それはある意味、（スピリットとしての）王道を継いでいるということになると思うので。高みを目指しつつ、そうなれたら本望です」

憧れる作家はウォーターハウス。細密に頼らない佇まいや存在感に惹かれる。また天使を多く描くアメリカのアボット・セイヤーのざっくりとした上手さは欲しいと語る。

制作にあたっては、アクリルで下地を作り、ある程度鏡面になるまで磨くのに一番時間がかかるという。写真も使う。先ずイメージがあって、ポーズを決め、衣装や小物をそろえ、フォトショップなどデジタルも使って準備を進めるが、あくまでもモデルを眼前において描くのが基本。制作の過程で不要なモチーフがあれば外し、欲しいものがあれば足していく。

今年の作品を尋ねると、二〇一八年の「小さな祈り」に続く作品で、折った後を描いてみたいという。ジョン・エヴァレット・ミレーが小さな子どもの祈りを描いているが、人間性が垣間見られるそうした世界を自分なりの感覚で描いてみたいと目を輝かせた。

「小さな祈り」のモデルは今年中学生になって成長した。近くの県民グラウンドで出会って声をかけた少女だという。

絵の世界は自由で、楽しく向かうのが一番大事ということを、松本さんはさまざまな回り道を通じてこそ実感し、次の世代にも伝えていきたいと考えている。「若い作家さんたちが不安を抱えていたら、大丈夫だよと言ってあげられるお姉さんの感じ

になれたらいいなと。指導もしてみたいです。教えることで、教わることも確実にあると思います。とかく絵を含めても好きなことをやる環境に恵まれて、そういう意味では感謝しかありません」。

昨年はあべのハルカスで個展をした。今年も東京でグループ展などを予定しているという。

「絵がやると楽しくなってきました。腰は重くとも、集中力を維持する能力には恵まれているのかもしれませんが。自分の絵は好き。でも満足することはないと思います。もっと描けるようになってほしいし、上手になりたいんですよ。だから、追い込む時は追い込んでいくのかなあと。好きなものを自分の中で、腑に落ちるまで味わって、気づきや発見が反映されていくのに身を任せて。『三国志』などの小説から題材にいうこともあるかと思っています」

「好き」というプラスの言葉がとても多い。そのエネルギーが絵の中にあふれている。繊細ゆえの悩みを乗り越え、好きなことを貫いていることがもつとも幸福な形で作品に結実していると感じた。



トを自分なりに配置し、分かる人がちょっと「にやっ」としてくれたらいいかなと、そのくらいの遊び心で」。二〇一九年の少年が杖を持って立っている作品がまさしくそうである。またこの少年は、あるゲームのキャラクターの少年期をイメージしたものであるという。

「ファミコンと共に育って今でもビデオゲームはリアルタイムでずっと追い続けています。今日技術の進化によって、没入感は当たり前。焼け落ちたノートルダムを再建するのに一役買うほど、時代考証に優れた作品も多く出ています」。基本、剣と魔法と錬金術のファンタジーが好き。登場する小物やストーリー、キャラクターの人間性、様々なところから着想する。

「幼少期に好きだったクラシック、恐竜やカール・セーガン、カードの意匠、それが多感期を経てのちに魔術の歴史や神話の系譜、宗教美術、図像学、占星術やユング心理学のイメージと象徴といったものに自分の中で纏まっていきました。絵も含めて本気で没頭したもの、様々なものが芽づるのようにつながっていると悟り、私の人生は間違っていなかったかも、と初めて思えました。好きなことはインスピレーションの宝庫です。そして、それは決して自分を裏切るものではなく、自分の魂に直結している『感覚』です。本気で好きになったものだからこそ、説得力に責任を持てる。道は

必ず自分に続いていて、魂が覚えたものは、決して裏切らないと思うのです」

年二回の大作は、環境やリズムに慣れてやっとペースがつかめた。基本的なことは変わらないが、白いキャンバスが怖くなくなってきたという。「昔はどう埋めよう、どう描こうかと怖かったのです。右も左もわからず、心のどこかでまずはご恩に報いなければ、先生を喜ばせなければと思ってしまい、最初の三年くらいは頑張れたのですが、次第にプレッシャーで心が限界になってしまつて、もう好きなようにやろうとなりました」。きっかけは、新しく指導してくださった先生の「描けるんだから、自信を持ってい。違ってい。自分の感性で描いていいんだよ。」という言葉。それがあって吹っ切れた。そうして選拔展に出ることが増え、白日会で準会員、会員になってと順調に進んだ。学生ときは本来好きな絵が描けなかったが、二十代半ばを



「NEW MOON」 2019年 第95回白日会展

過ぎてから戻ってきてよかったと振り返る、そしてデジタルでイラストを描くにしてもアナログにしても、基本はデッサンだと痛感する。

大作も以前よりは時間がかからなくなってきたという。「忙しい先生方は時間的にも作業効率的にも、様々な工夫をされて描いているというお話を聞いて、なるほどそういう描き方もあるのかと。こうでなければいけない、ボクシングをやるなら『あしたのジョー』のように血反吐を吐くまでやらないかダメというようなセオリーに縛られていたところがありました。絵描きは趣味を持つてはいけなとか、辛い犠牲を伴うものでなければならなとか。そんなことを言われたら私は多分失格なのです。人それぞれ波もペースも違う。自分は自分なりに、描きたいものを自分のなかで昇華して描けたらそれでいいじゃないかと思えるようになりました」。

彫刻

安田陽子

彫刻家
日展準会員

夏目漱石『三四郎』の中にも登場し、実際に漱石や樋口一葉、二葉亭四迷などの作家をはじめ、作曲家の滝廉太郎、言語学者の金田一京助など、名だたる文化人が居を構えた文京区。この一角に昭和初期に建てられた家のアトリエで彫刻の制作を行う安田陽子さんを訪ね、制作に込める思いなどをうかがった。



小さい頃から
ものづくりに触れる

安田陽子さんが育ったのは千葉県市川市で、近くに梨畑があるようなのどかな土地だった。幼少期、芸大を卒業し立軌会で活躍していた村谷壮一郎氏が創立した幼稚園に通っていた。ここでは子どもたち一人ひとりの興味や感性に向き合い、この時期ならではの柔軟な可能性を育てるために様々なアイデアが実践されていた。安田さんはここで初めて絵画をはじめモビールや指人形、七宝焼、アクリル樹脂を使ったアクセサリー製作など様々な物作りに触れた。「この幼稚園に行ったことで、何もわからないうちにもものを作ることを教えていただきました

した。紙粘土で指人形を作り、それに着せる服も針を使ってチクチク縫ったり、レンガを積んだ窯もあったので、焼きものも作った記憶があります。同じ頃に、住んでいた団地の集会所で行われていた絵画教室にも参加するようになったことで、さらに多くの作る楽しみを学ぶことができたんです」。また団地内や周辺には緑も多く、虫を追いかけて活発に走り回っていたそう。母が近くの畑を借りて野菜を育てていたので、その土から出てくる太いミミズを捕まえたり、子供の頃から土をいじるのが好きで、それはあらためて考えると今の粘土の仕事に近いのかもしれない。こうした幼い頃の経験とともに、東京藝大で建築を教えていた祖父の存在も、安田さんが美

術の道へと向かう大きな影響を与えた。「この家は祖父が昭和五年、両親と二世帯で住むために設計し建てた家だと聞いています。アトリエは祖父が使用するためにつくられたものです。私が物心ついたころには既にアトリエは使われていなかったのですが、今ここで自分が制作を続けられているのもこのアトリエがあつてのことですから、とても感慨深いです。祖父やアトリエの使用を許可してくださったこの家の方たちには本当に感謝しています。祖父をはじめ身近なところで芸術に関わる人がいたことで、私は美術の世界へ自然と導かれたような気がしています。やはりそういった周囲の環境というのは大きかったですね」。

Profile
Yoko Yasuda
1969年東京都生まれ。1989年女子美術短期大学造形科彫塑教室入学。1991年同短大卒業。1992年同造形専攻彫塑修了、日彫展初入選。1994年日展初入選。2011年日彫展優秀賞受賞。2012年NHKBSプレミアム 極上美の競演シリーズ日本美築いた仏(2)「奈良・新薬師寺・十二神将」にてパサラ造の塑像による復元制作。2016・2018年日展特選受賞。2019年PAROSギャラリー個展。現在、日展準会員、日彫展会員、女子美術大学芸術学部 短期大学非常勤講師。

よいものを自分に吸収して
良い作品を作るとい教え

すでに幼い頃から美術に密接に触れていた安田さんだが、小学校、中学校の頃の自身の関心は主に体を動かすことで、バスケットボールや陸上競技に対して熱心に力を入れていたそう。そのような中でも絵を描くことはずっと好きで、高校生になる頃には美大へ進みたいと思うようになった。もともとは色彩を使うことに興味があり、メインで受験したのは日本画だった。「日本画科を目指して受験しましたが、立体的な感覚でものを見るということもどこかで勉強してみたいと思うこともあって、当時、受験科目に鉛筆デッサンがあつた女子美術短期大学の造形科も受けてみたんです。そうしたら無事にひろっていただいて、そこからどつぷりと彫刻の道を今も続けているという感じです」。

入学した先で指導を受けるようになったのが桑原巨守氏だった。「良いものを見て、食べて、いろんなものを自分に吸収して良い作品を作りなさいという考えだったと思います。授業は彫刻を作るだけではなく、時にはクラシック音楽やジャズを聴いたり、フランス映画を観たり、歌舞伎の鑑賞に行ったこともありました。美術だけではなく、心の栄養になるものをいっぱい詰め込んだ学生生活でした。それから桑原先生

のことで特に印象に残っているのは、粘土で女性の像を制作していた時に、自分でもどうも中途半端なポーズだなと思っていたら桑原先生が近くに來られて、その像の首を手で掴んでガクッと折るように傾きをつけたんです。一瞬のことでびっくりしたのですが、その時その像の全体のバランスがびたつと決まって、作品として成り立たせるといふのはこういうことなのかと肌で理解しました。桑原先生は、作る時に空間をよく見なさいと仰っていて、モデルさんが立っている姿をよく観察し、なおかつ周りの空間をしっかりと見る、立っている像と空間の関係性を常に考えることを教えていた。だくことができました」。感性を磨くなど生の授業を二年にわたり受けてきたが、卒業を控え進路に迷っていた安田さんに大学に残って彫刻を続けていくこと、そして日展・日彫展へ作品を出してみるように勧めたのも、師である桑原氏だった。

「卒業後に制作を続けていいのか迷っていた時に専攻科に残って続けなさいとお声をかけていただき、それで私はまだ彫刻を作っていたいいのだと思えるようになりました。日展への応募に関しては、なぜ桑原先生が勧めて下さったのか本当のところは今もわかりませんが、やはり一番大きな全国的にも知られている公募団体ですし、作品を見に来てくださる方の数も膨大です。そこにはきっと何か意味があると思います、現





「脚を組む女」 2018年 改組 新 第5回日展 特選



ま制作をしていいのか、この時も揺れ動く気持ちがありました。そんな時にすごいタイミングといいますが、母校から非常勤講師の仕事の話をいただき、引き戻されるように再び自分は彫刻を作っているのだと思えるようになったのです。それから制作に専念するようになり、三年後の二〇一六年には日展で一回目の特選、一年二〇一八年には二回目の特選を受賞した。「特選を受賞した時は本当に驚きました。私の作品を見て下さっている先生方がおられるんだなど。久しぶりに会の懇親会に参加させていただいた時も、日展の先生方からお声をかけていただき、作品についても色々とお話をしてくださったので、あらためてきちんと制作していかなければならないと身に染みました。一人で制作をしていると、なかなか作品について意見をいただけることもなくなってくるので、日展とい

う会に所属していることは、自分にとって貴重な場であると認識しています。年々、公募団体に出品しようという若い方が減少しておりますが、自分の作った作品をこれだけ多くの先生方や鑑賞者に見ていただけるのは、日展のもつ大きな魅力だと思えます。自分を試すつもりで、あまり考えすぎず、しまわずに、思いっきり勢いのある作品を出品していただきたいと思います。展覧会で沢山の方の目に触れる機会があることは、自分にとって得ることも大きいと思います」

広がる粘土の可能性

「制作をするうえで、公募展に出品する作品は最終的に石膏取りをして、その後石膏を削ったり、直付けをして修正し、彩色を施して作品を仕上げていきます。全ての過



「樹の在る場所」 2019年 改組 新 第6回日展



「古い言葉」 2016年 改組 新 第3回日展 特選

在まで日展、日彫展に作品を出し続けてきました。

日展に初入選できたのは短大の専攻科を修了して二年後の一九九四年です。その後も決して順調ということではなくて、毎年必ず作品を作っていますが、落選することもある、いま振り返ると実験的なことを無頓着にやってみていたなあと思います。その失敗もいい経験でした。その時に感じたことや自分の中で浮かんたものの、何かの影響を受けて次の作品を作っていく、そのときに作りたいものをつくる姿勢は今もあまり変わっていません」

たとえば昨年の日展に出品した「樹の在る場所」は両足を軽く左右に開いて大地にしっかりと立つ女性の姿を作ったもの。ある

日、台風の中で強風に吹かれて揺れる木を見たことが作品のもとになっているという。「木が踊るようにうねっている様子を見ていて、あの木はよく倒れることもなくそこに立っているなと思ったんです。ああいうたくましいエネルギーのようなものが表現できたらいいなと思って、女性自体を木に見立てるという感じで作ったんです。でもご覧になる方によっては木の在る場所に佇んでいる女性なのかとか、それぞれの鑑賞の仕方で作品の前に立ち止まっていたかなものが出てきたらと思って作りました」

また日展で初めて特選を受賞した「古い言葉」については「このときは、新しくできた言葉がいっぱい飛び交っていた時で、

昔は綺麗な言葉がたくさんあったと思うんですけど、そういった言葉はどこに行ってしまったんだろうという思いがあって。古い時代の人々はどういう話し方をし、どんなことを考え、どのような生活をしていたのだろうかと思いついて作っているうちに、エジプトの文字のようなものが頭の中でリンクして、現代と古代エジプトを融合したような人物、体の左右で表現を少し変えることで時空が揺らいでいるような作品が作れたら面白いのではないか」ということが制作の思いのなかにあるという。

祖母の介護を終えて

春の日彫展と秋の日展のために年に二度の大きな展覧会に向けて作品を仕上げるというペースは、その後、現在まで毎年、欠かさず行われているが、その間には十年にわたる祖母の介護に力を尽くす時期もあった。「制作はしていましたが、モチベーションを保つことが結構大変でした。やはり介護をするということはどうしてもそちらに意識をもっていかなれますから。大変お世話になった祖母だったので、出来るだけのことはしてあげたいと家族みんなで最後まで在宅介護で見送ることができました。祖母のことがあって、人の役に立つこともしたいという思いで介護の資格も取得しました。十年にわたる祖母の介護が終わり、このま

程の中で、粘土をいじっているときが私は一番好きです。以前、BSの番組で奈良にある新薬師寺の『十二神将』の菩薩像の復元制作をお手伝いさせていただいたことがあります。そのときに感じたことですが、粘土で作られた塑像であるこの十二神将は、表面にほとんどヒビが入っていないことがとても不思議でした。どうしたらこういうことが出来るのかを考えていたので、素材である粘土にはまだまだ多くの可能性があるのでないかとあらためて思うようになりました。これからもその可能性をひとつずつ研究しながら、しっかりと制作を続けていかなければならないと思っています」

幼い頃から土いじりが好きで、彫刻の道を歩み続けている安田さん。安田さんが生み出す大地のエネルギーを存分に吸収して、そこにたえず人物たちは、どこか現代とも古い時とも重なるような不思議な時間の流れの空間にいるようだ。自然と人間と、それぞれのエネルギーが不思議な形で融和している。現在、巷では新型コロナウイルスが猛威をふるっているが、その現代をあらためて自分たちの脚で踏みとどまり、冷静にとらえていくことの大切さを、どこか安田さんの作品たちは静かに語りかけてくれる。

武田 司

漆芸家
日展会友

漆を使った伝統的な技法を用い、工芸と絵画の領域にわたるような作品で自然のエネルギーを形象化したような作品を作る武田司さん。画面には微妙な盛り上げレリーフが行われ、その上に細微な卵殻を幾枚もはり、モチーフが描かれていく。高度な技術と豊かなイマジネーションの世界をたくみに融合させる武田さんの制作現場を訪ね、これまでの歩みなどについてうかがった。



父親の病をきっかけに 漆工芸の道へ

富山県出身の工芸家で、日展の会員でもあった武田武弘氏の次女である武田さんは、幼い頃から家で制作を行う父の姿を見ながら育った。また、武弘氏の従兄弟も日本画を描いていたという。「二人とも日展に出品していたので、当時は上野の東京都美術館で開催されていた日展を、小さい頃から毎年、見に行っていました。現在も活躍されている先生方の作品も、すごく記憶に残っています。まさかその当時は自分が出品するとは夢にも思っていないませんでした。実際に出品させていただくようになって、先生方と実際にお目にかかり、作品に

ついてもお話しいただけるようになったのは、すごく幸せなことだと感じています」。雨で外に遊びにいけない時には、家の中でハサミとカッターを使って、紙で自分だけの動物園を作ったり、手を動かして物を作るのが好きだったという武田さんだが、大学に入学するまで自分が作家になるということは考えていなかった。「作家として生きる父の姿を間近に見て育ったので、プロの工芸家になって作品を作り続けるということの怖さも感じていました。制作前の不機嫌な状況なども、同じ家のなかですからももちろん目にすることもありました。だからそういう生活を自分もおくれるとは到底思えなくて、高校も普通科でしたし、将来的には美術をまわりからサポートできる

学芸員のような仕事に就きたいと思って、大学は美学科に進みました」。そんな武田さんの将来を大きく変えた出来事が大学三年の時に起こった。「父が病気をして、入院したんです。四十年近く毎年欠かさず日展に出品していたのですが、このときは一度だけ休まざるをえませんでした。その時に病室にお見舞いに行くと、父がベッドの上で下図を描いていて、『今年はこのように作品を作ろうと思っただんだよね』と何度も残念そうに言うのです。それまで父に対しては飄々と仕事だけをしているというイメージしかなかったのですが、まさか出品できないことに対してこれほどの拘りをもっていただとは思っていませんでした。そして、今はまだ若くて病気が

Profile
Tsukasa Takeda
1992年跡見学園女子大学文学部美術史学科卒業。1993年日本現代工芸美術展初入選（以降毎年、1996年現代工芸賞2001年現代工芸本会員賞、2012、2017年審査員）、千葉県美術展 千葉県美術会長賞受賞。1994年日展初入選（以降毎年、2003年会友推荐、2014、2019年特選）、伊勢丹松戸店、日本橋三越等で個展。現在、日展会友、日本現代工芸美術家協会評議員、千葉県美術家協会常任理事。

治ればまた日展に出品できるけれど、いつか出来なくなる時がきた時に、少しでも何か手伝えることができる自分になっておこうという気持ちから、大学卒業後に就職はせず、しばらく父の仕事を手伝うことで漆工芸を習得しようと思いました。最初は二、三年くらいという軽い気持ちだったのですが、思いのほか父も賛成してくれて、せっかくなら自分の作品をきちんと作って展覧会に出品してみたらどうか、とにかく数を経験しないと、出来るものもできないから

と言われて自分の作品を作るようになりました」。このようにして入った漆芸家への道だったが、漆を使った制作は覚えることが多く、それだけに必死だったという。「でも十年ほど経って、ひととおり技術的なことを覚えた頃からは、本当に自分はやっていけるのかと不安ばかり感じるようになってきて、でもとにかく作り続けて、気がついたら二十七年が経っていました。今でもやはり不安はつきないです」。

新たなテーマを探し続ける

大学を卒業した翌年には日本現代工芸美術展に「祭りの跡」を初出品し、初入選を果たす。そしてその翌年、日展でも「清晨」という作品で初出品、初入選することができた。「制作をはじめたばかりの頃は、いたい自分がどんな作品を作ったらいいのかが分かっていなかったもので、毎回身近なところでテーマを探していました。『清晨』は、近くにある水元公園に取材に行き、白鷺やゴイサギ、蓮池などのスケッチをもとに作りました。でも自分の中ではなにか違うなという気持ちが強くて……、だからといって具体的にどうしていいかはわからないという状態でした。ただ、当初から錆漆によるレリーフを技法として使いたいというこ

「戯」 2006年 第38回日展





「繋ぐ」 2014年 改組 新 第1回日展 特選



おやかで大胆な構成で表現した感性豊かな作品である」と評され、二回目の特選を受賞した。「筆で描くような繊細な線を、うずらの卵の卵殻螺鈿で描き切ることが出来ないだろうか」と思い、一ヶ月間、晩夏の繁茂する草花を卵殻螺鈿で貼り続けました。その日々が報われる思いでした。漆工芸は出来上がりの華やかさとは裏腹に地道な作業が多いのですが、仕上りを想像するからこそ頑張れます」。

これからも新たなテーマを探していきたいという。

日展は大切な鍛錬の場

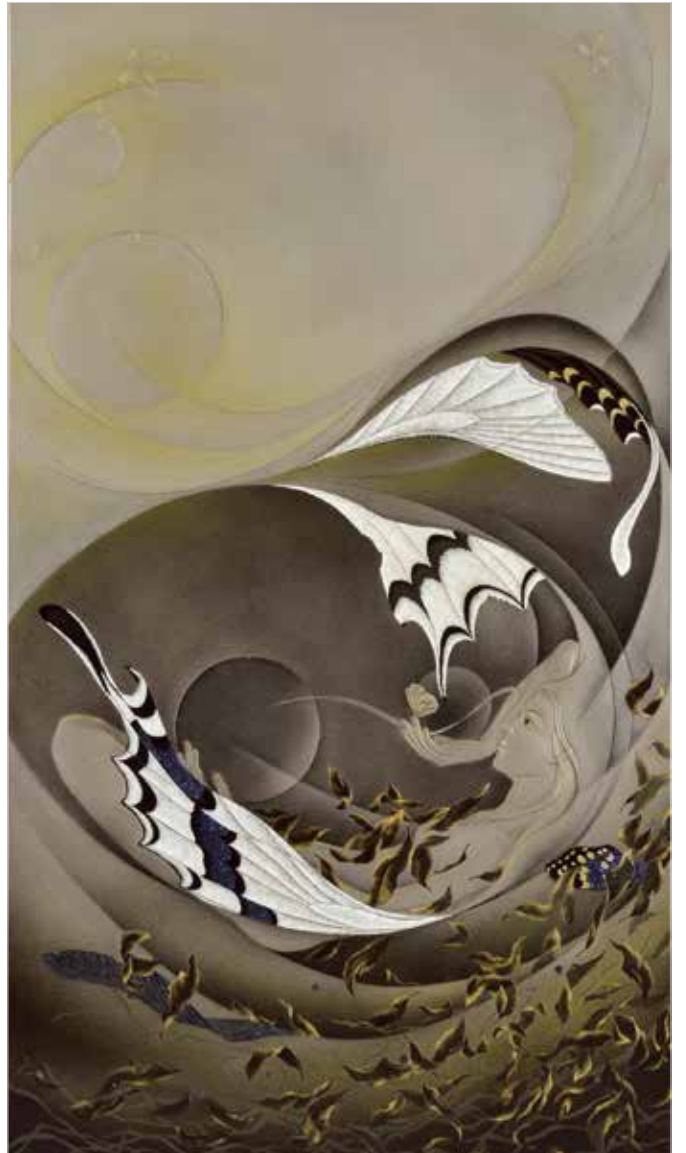
美大出身ではない武田さんにとって、日展や日本現代工芸美術展といった公募展の



「白露—玄鳥去る—」 2019年 改組 新 第6回日展 特選

存在は非常に大きいという。「日展の工芸は伝統の技術を用いて、さらに自由な表現を求める作家たちの集団だと思っています。工芸はとくに技術と表現のバランスがすごく難しいと思うのですが、日展の会場を毎年拝見するたびに、他の先生方の作品から学ぶところが多いですし、自分の作品についても先生方が様々なご意見を仰ってくださいます。それは本当に貴重な経験で、ここまで作品を作って日展に出品させていただき、現場で鍛えていただいて来たと感じています。また、この様な場が在ることは、日展の先人の方々が大切に守ってきて下さった賜と本当に有難く感じています。実際に毎年作品を作り続けるというのはかなり大変で、新しい作品を生み出すための蓄積は日々なわけですが、取り組み続けると

いうことが重要なのではないのでしょうか。そうして出来上がった作品を会場に展示していただき改めてそこで見ると、素直に反省できますし、他の方の作品を拝見して自分に足りないものを見出すことができます。出品を続けて二十五年が過ぎ、その中で自分が納得できた作品がいくつあるかと考えると、本当に少ないのです。でもその納得できる作品を生み出すために失敗があり、後悔があつてということを繰り返している中で、いつかはここにたどりつくために私は作っていたのだというのが、一つのシリーズの中で一つは出来るようにこれからも制作していきたいです」。



「継がれゆく刻」 2012年 第44回日展

三年目に姉にモデルになってもらって、初めて女性像をテーマに、『午睡』という作品を作り、そこからしばらく女性像をメインテーマにして、日常生活を切り取るような作品を続けました」。十年ほど女性をテーマにした作品を作り続けた後、武田さんはどこか行き詰まりを感じるようになっていった。「これだけを作り続けていいのかという感覚に陥っていたんです。その頃にたまたま川端龍子の展覧会を見て、とにかくダイナミックで、現実のものである草花や子ども達、動物、飛行機、汽車など何を描いても面白く魅力的、さらに架空のものも生き生きと表現をされていて、憧

れの気持ちを抱きました。そこで自分もこれまでの日常を描くのではなく、何か架空の世界を描いてみたいいいのではないかと考えるようになり「鬼のシリーズ」に挑戦しました。ちょうどその頃、名古屋で親子二人展をさせていただく機会があつて、搬入を終えると奈良に行つて色々なことを調べていくうちに、奈良と鬼という新しいテーマが見つかり、五年はとにかくやってみようと決めました。たとえば寺社などに行くと、ふとした時に感じる「気」のようなものがありますよね。そういう日本人特有に感じられる気のようなものを、子鬼の姿を借りて

表現することができないだろうかと思つて、五年間で十点制作しました。その鬼のシリーズの最後に作ったのが『長谷雄草紙』という絵巻物の話をテーマにしたもので、その時にまた女性像が出てきて、もう一度あらためて女性をモチーフにすることにしました。でもこれまでのように日常生活を描くのではなく、女性像を借りて土や水といったものを擬人化したようなテーマで制作できないだろうかと思うようになりました」。ひとつひとつのテーマを吸収し、そして新たな世界を目指して歩み続けてきた武田さん。鬼のシリーズを経て、女性像をモチーフとした作品に改めてとり組むようになり、二〇一四年改組新第一回日展において、地中の様をテーマにした「繋ぐ」で初めて特選を受賞した。「東京近郊の山に友人と登り、ヘトヘトになって休んでいる時に、地面に落ちた蝶の羽を見つけたんです。すごく綺麗なんですけど、じつはそれは外敵に襲われて食べられてしまった跡なんです。そうやって生き物も植物も土に還っていく自然の循環みたいなものを、女性像を借りて表現できないかと思つたんです。それから、生き物も植物も菌糸に纏われて土へと堆肥化していくことを知り、菌糸を糸状に卵殻螺鈿と鮑貝の螺鈿を施すことで漆工芸ならではの技法で描く面白さを再確認しました」。そうした作品を経て、昨年の「白露—玄鳥去る—」では、「た

河西樸堂

書家
日展会員

中国の殷の時代には既に存在していたと考えられる印。古くから流通経済の重要な役割を果たしてきたが、その後、印は時代を経るとともにその芸術性の高さを増し、鑑賞としての独立した役割を備えるようになっていった。こうした古い歴史を持つ篆刻の世界に魅せられ制作を続けている河西樸堂さんに、これまでの歩みや、制作についての思いをうかがった。



篆刻との出会いと 本物に触れるということ

山梨県出身の河西さんのご両親は、もとも篆刻業を営んでいたそう。そのため、河西さんも必然的に小学校に上がる頃から手習いをしていたという。「自分でもいつか家業を継いで篆刻をするのだろうと思っていたのですが、高校を卒業する少し前に中学の時の担任の先生から、東京にある大東文化大学で文字に対する知識を深めたらどうかという話があり、急遽、進学するこ

とになりました」。こうして山梨から上京した河西さんだが、そこで篆刻への道へと深く進んでいく大きな出会いを果たすことになる。「大学では書道部に所属したのですが、先輩から篆刻をやった方が良いというお話があり、その方の知人を通して、小林斗盞先生を紹介していただきました。最初にお目にかかったのは、一年生の夏で日展などの準備で忙しくされていて、もう少し後になってから自分の作品を持ってくるように言われたのです。それで字を書いたり、自分で彫った石を持っていったとこ

ろ、『では始めてみなさい』と仰っていた、それが篆刻を始めるきっかけになり、後に日展に出品することにつながっていきます」。小林氏が亡くなるまで十九歳からほぼ三十年にわたり教えを受けた師との出会いだっただけでなく、

篆書法や刀法といった基本的なことは、自分で昔の本を読みながら勉強しました。和訳したものだけでなく、漢文のままのものも必死で読んでいました。そうしなければ次に進めない、必然的に一生懸命になつて身に付きますよね。もしかしたらそうした方が自分のためになるという先生のお考えだったのかもしれない。

先生は何にしても、若い十代のうちは良いものを見るようにと仰っていました。実際にご自身がお持ちの書画や甲骨、玉印などを折に触れて見せて下さることもあり、そのように二十代の頃に拝見したものは、今も鮮明に覚えています。あるときまではものの良し悪しなどほとんどわからなかったのですが、本物に触れる経験をさせていただいたことで、私なりの判断がだんだんと出来るようになっていきました。今考えてみても、自分は本当に大切なことを教えていただいたとつくづく思います」

師からは印譜も印刷物ではなく必ず現物を見るように言われていたそうだが、単なる技巧の習得ではないそうした本物の根底を吸収する経験が、河西さんの作品の根底を形作る大きな栄養となつていくことに間違いはないだろう。そうした教えを受けながら、大学四年の時に初めて日展へと挑戦したが、残念ながら入選は果たせず、初入選となるのは二十七歳の時だった。「しばらく落選が続いた後に初入選となりまし

たが、またその翌年は落選でした。ただ入選でも落選でも、もともとマイペースなところがあるので、そこまでは気にはならなかったです。それよりも作品を作って、小林先生に習うことが大切だと考えていたからです。僕の場合は最初から日展を目指していたということではなく、師をはじめとする様々な先生方との出会いやまわりの環境の流れで自然とこの世界に入ったところがあつて、そういう意味でも恵まれていたように感じます」。

作品を作り、指導を乞うことに重きを置いて制作を続けてきた河西さんだが、毎年



「必有重勳大功而後得見」 1999年 第31回日展



それに見合うものを作らなければならぬという感覚は常に持っています。

ただ毎年、作り続けるというのは本当に難しいことで、特に私の場合は作るのが遅くて、たとえば四つの文字を使った作品の場合でも、沢山のものの中から徐々に追いつめて考え抜いていかないと気が済まないたちなので、ものすごく時間がかかります。十一月の末に日展が終わり、その頃から翌年の出品作について頭の中で考え始めます。頭の中ではなんとなくできているのですが、春になって夏を迎え、だんだんと出品の期日が迫ってくると、いわゆるデッサンにあたる印稿がようやく出来上がりします。ただそこまで出来れば、彫る作業にはそれほど時間はかかりません。篆刻の場合、一度、彫り上げてから補刀といって、線をちょっと細くしたりといった調整をしないと、もとの形からどんどん変わってしまいます。ですから私の場合は、彫る時間を短くして、補刀はほとんど行わないようにすることが多いです」。徹底した古典のベースを身につけ、さらにそれを常に深めていこうとする制作に対する真摯な姿勢が、しぜんと作者のオリジナリティを生み出す。それが河西さんの作品から発せられる生き生きとした強さとエネルギーを支えているのだろう。

昨年には初めて日展の審査員を経験し、



「克紹箕裘」 2006年 第38回日展 特選

古典を学ぶことの大切さ

古典に重きをおいていた師の薫陶を受けた河西さんも、やはり古典の大切さを重視している。「篆刻は古くから字法、章法、刀法という『三法』が大切だと言われています。字法は文字の知識を深める部分で、章法はデッサン、文字の構成の方法です。ただ持ってきた古典の字をそのまま彫るのではなくて、印面の中にうまく配分する必要があります。そして刀法は彫り方です。篆刻に用いる篆書にも種類があり、それぞれ使われていた時代が異なります。たとえば金文は殷・周の時代の文字で、その少し前には甲骨に刻まれたものなどもありますし、小篆は秦の始皇帝の時代にまとめられたものです。作品を作るにあたっては、そういったものを分類し、それぞれの中から利用させていただきます。ひとつひとつが本当に美しく、二千年、三千年前によくこれだけの文字の形が出来上がったものだと見ているだけで楽しくなってきます。でも楽しむだけではだめで、それと比較して自分自身のものがどれくらい及ばないのかを理解するように仰っていた小林先生のお言葉は今も心に強く残っています。

もちろん何千年を経て今に残った古典を上回るのは私にはとてもできないことですが、古典をしつかりと学ばせていただいたことで各時代の篆書の良さを知ることが

現在は日展会員となった河西さん。以前のような教えを受ける立場から、逆に作品に対してアドバイスを求められるような立場へも変化している。「とても審査をさせていただく立場ではないと自分では思っているのですが、昨年は周りの先生方に助けていただき、なんとか無事に審査を終えることができました。ただ立場や肩書きが変わったからといって、作品が並行して上手くなるということは絶対にありませ

できたのは、自分の制作に大きな影響を与えていると思います。皆さん、同じ古典を勉強していると似通ってくると思われるかもしれませんが、不思議と一人一人、出来上がった作品は違ったものになります。僕自身はあえてオリジナリティを出そうとは思いません。なかなか古典を越えられるわけでもないですし、その時その時の自分の感覚で精一杯やるしかないという気持ちです」。

常に学び続ける

実際に制作についてはどのように行われているのか、河西さんにうかがうと「作品を作るにあたっては全く白紙の状態から今回はこういう古いところを使ってみようとか、詩文を持ってきて、書体を決め、構成していきます。それを決めるには、まずは色々と調べるのが前提として必要になります。毎年展覧会に出品する作品を作るということは、常に自分自身を学び続ける姿勢に向かわせてくれます。そういう意味でも展覧会に出し続けるというのはとても大切なことではないでしょうか。特に日展には他の展覧会よりも強い緊張感があります。日展の場合は入選率が低いということもありますが、絵や彫刻といった他のジャンルの方々と同じ会場での展示となるわけで、やはりある程度の一年間の集大成というか、

ん。よく一生勉強だとも言われますが、いつになっても始めた頃と同じなのではないでしょうか。書の世界では六十歳で新人、七十歳でやつと中堅、五十代までは下働きというようなことも言われます。篆刻の世界はやはりいきなり簡単にできるものではなく、長い時間をかけて一つ一つ基礎から積み上げなければならぬということはいくらも常に忘れずに制作に励んでいきたいと思っています」。



上:「亀長於蛇」 下:「菊華令人寿」 2000年 第32回日展

展覧会概要

日展は、明治40年の第1回文展より数えて、今年113年を迎えました。今年も10月30日（金）～11月22日(日)まで、国立新美術館にて日展を開催いたします。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の5部門にわたり、全国各地から応募された作品の入選者ならびに日展会員、準会員、前年度特選受賞者の作品約3000点が一堂に会し、幅広いジャンルの現代の芸術作品をご覧くださいます。東京展の後は、京都、愛知、大阪、富山の4か所を巡回いたします。

展覧会名	改組 新 第7回 日本美術展覧会		
英 文 名	The 7th Reorganized New NITTEN The Japan Fine Arts Exhibition		
会 期	2020年10月30日（金）～11月22日（日） （休館日）11月4日（水）、10日（火）、17日（火） （観覧時間）午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）		
会 場	国立新美術館 東京都港区六本木7-22-2 東京メトロ千代田線乃木坂駅直結 都営大江戸線 六本木駅7出口徒歩約4分 東京メトロ日比谷線六本木駅4a出口徒歩約5分		
主 催	公益社団法人日展		
後 援	文化庁／東京都		
入 場 料	一般	高・大学生	
当日券	1,300円	800円	
前売券・団体券（予約制）	1,100円	600円	
・小・中学生は無料。団体券は20名以上。20枚購入につき招待券を1枚進呈。 ・前売券は、チケットぴあ、ローソンチケット、ファミリーマート店内Famiポート、CNプレイガイドほか主要プレイガイド、デパート友の会、画廊、画材店などで発売。（前売券販売期間:10月1日～10月29日） ・日展ウェブサイトからもご購入いただけます。			

★お得なチケット★

ペアチケット	1枚2,000円。お二人で入場の方、またはお一人で会期中 2 回入場いただく方に、お得なチケットです。他の割引との併用はできません。（販売期間は前売券と同じ）
トワイライトチケット	観覧時間：午後4時～午後6時 入場料：一般 400円/高・大学生 300円
・チケットやイベントなど最新の開催情報は「日展ウェブサイト」 https://nitten.or.jp/ でご確認ください。	

一般お問い合わせ 日展事務局 TEL.03-3823-5701

巡 回 展（予定）

京都	令和2年 12月19日（土）～ 令和3年 1月15日（金）	京都市京セラ美術館
名古屋	令和3年 1月27日（水）～ 令和3年 2月14日（日）	愛知県美術館ギャラリー
大阪	令和3年 2月20日（土）～ 令和3年 3月21日（日）	大阪市立美術館
富山	令和3年 4月24日（土）～ 令和3年 5月 9日（日）	富山県民会館美術館

報道関係お問い合わせ

報道関係のお問い合わせ、ご取材、写真申し込みなどは下記までお願いいたします。
 日展広報事務局 松井
 TEL 03-6312-4098 FAX 03-6862-6727 MAIL sr@mbr.nifty.com
 〒107-0062東京都港区南青山2－18－20 南青山コンパウンド502

会期中のイベント

＊最新の情報は、公式サイトで告知させていただきます。

作家の声を聴くプログラム

作家による作品解説や、ゲストとの対談風景、作家インタビューなどのダイジェストをご覧ください。ただき作家を身近に感じていただくプログラムを開催いたします。



日展公式サイト<https://nitten.or.jp>でご覧になれるほか、日展会場でも放映いたします。

- ☐ 「作品の解説」
各部門（日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書）特選などの受賞作品を中心に、作家が解説をいたします。
- ☐ 「理事長対談」（ゲストは公式サイトで発表!）
奥田小由女理事長がゲストと対談を行います。
- ☐ 「作家インタビューダイジェスト」
日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書、それぞれのアトリエで日展作家にインタビューした様子をダイジェストでご覧いただけます。

小・中・高校生対象

わくわくワークショップ ―特別編―

「手紙を書こう!」
 今回は、いつでも参加していただけのイベントとして、会期中に「手紙を書こう!」を実施いたします。作品を見て発見したこと、不思議なこと、聞いてみたいことを「言葉」にして、会場内の専用ポストにご投函ください。作家から返事が届きます。



- ☐ 参加資格
小・中・高校生
- ☐ 参加方法
⇒日展会場で作品を見て、好きな作品を選ぶ。
⇒「手紙を書こう!」コーナーで、その作品の作家に手紙を書く。（質問、感想なんでもOK!）
- ★日展会場の専用ポストに投函すれば、特製缶バッジプレゼント!
※公式サイトでも受け付けます。（缶バッジプレゼントは会場のみ）
⇒作家から返事が届きます

日展のみどころ

5つの部門（日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書）の作家が年に1度、日展のために制作した新作が揃う、世界でも類をみない総合的な公募展。

明治40年から続く今年113年目の美術展
 日本最大の公募展で、歴史的にも多くの著名な作家を生み出してきました。昨年の応募者数は11,508点で、入選者と無鑑査作品、合計2,967点の最新作を展示しました。

文化勲章受章者の中村晋也（彫刻）、大樋年朗（陶芸）、今井政之（陶芸）、文化功労者の奥田小由女（人形）、橋本堅太郎（彫刻）、日比野光鳳（書）、尾崎邑鵬（書）をはじめ、宮田亮平らの作品も展示。10代から100歳を超える作家たちの現在の作品をご覧くださいます。

展示された作品は作家の今を写す鏡ともいえます。
 作品から世相や背景など多くのことを読み取る楽しさがあります。

伝統的な作品から現代的な作品まで、テーマもジャンルも幅広い作風をご覧くださいます。

鑑賞の理解を深めるイベントを開催。
 第7回日展では、新型コロナウイルス感染拡大の予防措置として、「らくらく鑑賞会」「ミニ解説会」「グループ解説」「触れる鑑賞」プロジェクトを中止とさせていただきますが、「作家の声を聴くプログラム」や、作家に手紙を書くワークショップなどを開催いたします。

